



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

学校教育におけるジェンダー平等戦略－教育環境と 教育内容に焦点をあてて－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-10-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 直井, 道子, 福富, 護, 村松, 泰子, 大竹, 美登利, 高橋, 道子, 中澤, 智恵, 松川, 誠一, 眞鍋, 倫子, 木村, 育恵, 苫米地, 伸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/90507

テーマ別分析

1．子どもたちの職業観：職業カテゴリーの分析から

眞鍋倫子

1.1. はじめに

われわれの社会においては、男性であるか女性であるかによって、つくことを期待される職業も、実際についている職業もことなっている。子どもたちの職業希望についても、男女差が大きいことはよく知られている。女子であれば保育士や小学校の先生、看護師、美容師といった女性の多い職業を希望し、男子であれば医師や製造系の仕事を希望するといふように、希望職業の男女差は、これまでも多くの研究で指摘されてきた。

日本労働研究機構（2001、2003）では、子どもたちの職業観について検討を行っている。それによると、子どもたちが複雑な職業世界をできるだけ簡単に理解するために、性別が非常に早くから利用されていることが指摘されている。すなわち、子どもたちは職業世界を男性のものと女性のものに分け、異性と結びついている世界を探索対象から「排除する」のである。自己の性別にふさわしいとされる職業の中から、自己の能力や適性に応じて職業を探索し、希望を形成していくとされている。

子どもたちが職業を探索する際にジェンダーを基準として用いているとすれば、子どもたちの希望は、まさに子どもたちの目に映っている現実としての「職業におけるジェンダー」を反映しているといえる。子どもたちが職業世界を眺めるとき、その社会はどのように見えているのだろうか。どの職業が女性のものとして、また男性のものとして認識されているのだろうか。本論は、子どもたちの希望する職業の分布とその変化をみることで、子どもたちの職業観がどのように変化するかを見ていくものである。

特定の職業が男女どちらかの性別と結びついていることは、どの社会でも起こっていることである。しかしその一方で、「ある特定の職業が男性または女性の職業とされていること」は、かならずしもさまざまな社会に共通な現象ではない（姫岡 2004）。特定の職業が「女性の職業」または「男性の職業」とされるかは、その社会のさまざまな条件によって異なる。実際、近年では男女の混合職化が進んでいるともいわれ（首藤 2003）子どもたちの認識にも変化が起こってきているとも考えられる。

今回の調査では、調査対象となった生徒に「あなたは、将来どんな仕事をしたいですか」と問い、自由に回答してもらった。本稿では、この設問を中心として分析を行い、子どもたちの将来生活がどの程度性別と関連しているのか、またその職業が自己理解や学校生活とどのように結びついているのかについて検討するものである。

1.2. 分析

1.2.1. 希望職業についての記述統計

今回の調査では、希望する職業について、「あなたが将来就きたい仕事は何ですか。」と問い、自由に記述してもらった。そのため、その回答は多岐にわたったものとなった。職業名を書くようにと指示したにもかかわらず、実際にはかなり異なったタイプの回答もあった。また、職業の内容を書いたものなども多くみられた。そこでまず最初に、回答のパターンや具体的に書かれた職業についての集計を概観していく。

1.2.1.1. 回答パターン

先にも述べたとおり、今回の調査では、希望する職業について自由に記述する方式をとったため、回答自体がかなり多岐にわたっていた。職業名を書くものが多かったが、職業の内容的なものを書くものもあり、「きまっていない」などと回答するものもいた。そこで、何らかの記述をしてある回答について、4つのパターンに分類し、性別・学年によって回答パターンに差がないかを確認した。

- 1：職業名：職業名を書いているか、職業名が類推できる回答
- 2：内容：　：○○関係、○○系といった書き方や会社名を書いたものなど
- 3：未定　：「まだ決まってない」「わからない」と書いてあるもの
- 4：非該当：「東大へ行きたい」など、質問の趣旨とずれた回答
- 5：記入なし

以上のカテゴリーの学年・性別別のクロス集計が図表 -1-1 である。この図表の結果から、記入をしないものが小4では20.4%と約五分の一であったのが、小6では27.5%、中2では32.8%と、学年が進むにつれて、回答を記入しないものが増加することがわかる。また、何らかの回答をしたものの中では、職業名を書いているものが小4では72.3%、小6では63.9%、中2では56.2%と学年があがるにつれて少なくなっており、その一方で職業の内容を書くものが少しずつではあるが多くなる。

また、性別による差もあり、記入をしないものは小4では男子25.9%に対して、女子は14.6%である。中2でも男子は38.7%と4割近くが回答していないのに対して、女子は26.2%と回答しないものは少なくなっている。また、職業名を書いているものも小4でも男子で職業名を書いたものは65.8%、女子は79.2%と女子のほうが多く、中2では男子で職業名を書いているものは49.1%と半数を割り込むが、女子では64.2%と3分の2近くが課職業名を回答している。

【図表 -1-1】希望する職業に関する項目と性別及び学年のクロス集計（％）

		職業名	内容	未定	非該当	記入なし	人数	χ ²
小4	男性	65.8	3.4	3.0	1.9	25.9	468	***
	女性	79.2	4.1	0.7	1.4	14.6	437	
	合計	72.3	3.8	1.9	1.7	20.4	905	
小6	男性	57.3	5.0	2.7	0.2	34.8	440	***
	女性	70.4	6.2	2.2	0.7	20.5	453	
	合計	63.9	5.6	2.5	0.4	27.5	893	
中2	男性	49.1	9.8	1.1	1.3	38.7	468	***
	女性	64.2	8.0	1.2	0.5	26.2	413	
	合計	56.2	9.0	1.1	0.9	32.8	881	

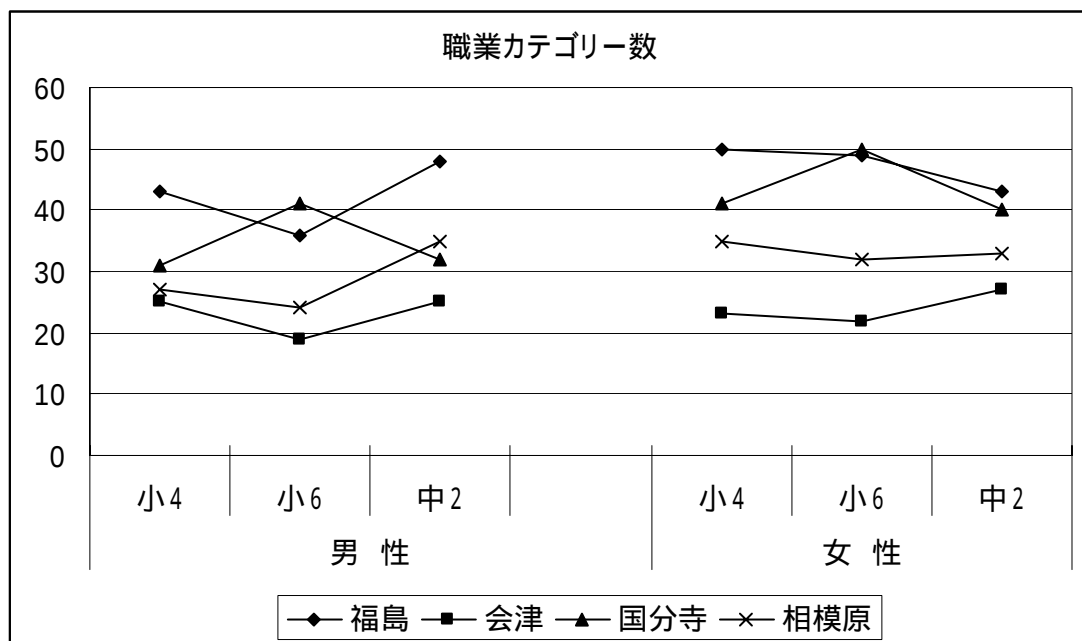
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

このように、学年が進むにつれて、また女子より男子が回答しない、具体的な職業名を書かない傾向にある理由は、今回の調査からは不明である。しかし、この点は、今後の分析でも留意が必要であろう。

1.2.1.2. 希望する職業の男女差：職業数からの検討

次に、回答された職業がいくつあるかについても検討しておきたい。実際に回答があった職業数を学年および男女、地域ごとにカウントした。一般的には、職業知識があるグループのほうが、希望する職業として回答される職業の数が多くなると考えられる（工藤他2003）。

【図表 -1-2】書かれた職業カテゴリー数（性別・学年・地域別％）



図表 2 からは、学年が進むにつれて希望する職業の数が多くなるとはいえないようである。しかし、ほぼどの地域、どの学年でも女子のほうが、希望する職業として書く職業の数が多くなっており、女子のほうが豊富な職業知識を有していると考えられるだろう。

また、地域差も非常に大きく、福島や国分寺の子どもたちが希望する職業の数は多く、相模原はやや少なく、会津地域ではかなり少なくなっている。職業知識は、「子どもたちから見える職業世界」を反映していると考えられることから、子どもたちに見える職業というものに、地方による差があることがわかる。

1.2.1.3. 上位にあがった職業カテゴリー

次に、具体的に希望する職業名を書いている解答について集計し、小 4、小 6、中 2 のそれぞれの希望職業の上位を示した。女子の上位を表 2、男子を表 3 に示した。

【図表 -1-3】女子の希望職業（上位）

小4女子			小6女子			中2女子		
職業名	N	%	職業名	N	%	職業名	N	%
小中高教員	27	7.8	保育士	33	10.2	保育士	44	16.3
ケーキ屋	26	7.5	小中高教員	21	6.5	小中高教員	21	7.8
医師	25	7.2	美容師	18	5.6	美容師	17	6.3
保育士	25	7.2	パティシエ	17	5.3	看護師	16	5.9
パン屋	18	5.2	漫画家	16	5.0	医師	9	3.3
看護師	14	4.0	デザイナー	13	4.0	パティシエ	9	3.3
漫画家	14	4.0	動物飼育・トレーナー	13	4.0	獣医師	6	2.2
ペットショップ	12	3.4	看護師	11	3.4	幼稚園教諭	6	2.2
パティシエ	11	3.2	医師	10	3.1	薬剤師	5	1.9
花屋	9	2.6	イラストレーター	9	2.8	介護師	5	1.9
獣医師	8	2.3	獣医師	8	2.5	漫画家	5	1.9

女子は、小 4 では上位は、「教員」が 27 人、「ケーキ屋」が 26 人、「医師」25 人「保育士」25 人、パン屋 18 人と続いている。ただし、1 位が非常に突出しているというわけではなく、上位 5 位までのカテゴリーを希望するものの数はほとんど違いがなく、希望職業のばらつきが大きいことがわかる。

小 6 では上位が「保育士」33 人、「教員」21 人、「美容師」18 人、「パティシエ」17 人となっており、保育士がトップになり、さらに美容師を希望するものも 4 年生と比べると多くなっている。また、1 位の保育士が、他の職業に比べてやや多くなっている点が小 4 と異なる点である。

中 2 では「保育士」44 人、「教員」22 人、「美容師」17 人、「看護師」16 人といった職業が上位になる。小 6 と比べても、さらに「保育士」に希望が集中していることがわかる。

では次に、男子の希望職業をみていこう。

【図表 -1-4】男子の希望職業(上位)

小4男子			小6男子			中2男子		
職業名	N	%	職業名	N	%	職業名	N	%
野球選手	71	22.9	野球選手	52	20.5	サッカー選手	28	12.0
サッカー選手	64	20.6	サッカー選手	33	13.0	野球選手	18	7.7
医師	11	3.5	医師	17	6.7	小中高教員	10	4.3
コック・料理人・調理師	10	3.2	大工	11	4.3	警察官	9	3.9
バスケット選手	9	2.9	サラリーマン・OL	8	3.1	コック・料理人・調理師	8	3.4
大工	8	2.6	バスケット選手	7	2.8	自動車整備士	7	3.0
漫画家	8	2.6	弁護士	7	2.8	公務員	7	3.0
分類不能	8	2.6	小中高教員	5	2.0	医師	6	2.6
その他販売	7	2.3	漫画家	5	2.0	大工	6	2.6
その他スポーツ選手	6	1.9	警察官	5	2.0	バスケット選手	5	2.1
科学者	6	1.9	公務員	5	2.0	プログラマー	5	2.1

男子は、小4では「野球選手」が71人、「サッカー選手」が67人最も多い。続いて「医師」「調理人」が続く。1位と2位のサッカー選手と野球選手を合わせると43.5%となり、半数近くがこの二つの職業に集中していることがわかる。

小6でも、男子は「野球選手」が52人、サッカー選手33人と非常に多くなっている。続いて、医師17人、大工11人と続いている。小4と同様に、サッカー選手・野球選手に集中する傾向が強い。

中2でも「サッカー選手」が27人、「野球選手」が18人と上位2位を占めているが、続くものとしてはスポーツ関係および小中高教員が11と続く。

このように、学年別に男女の希望職業の上位をみると、男子については、小学校4年や6年ではサッカー選手と野球選手に希望が集中しているが、中2になると、やや分散する傾向が見られた。一方女子については、男子に比べて希望する職業が分散する傾向が見られたが、学年がすすむにつれて保育士への志望が増加する傾向がみられる。

1.2.1.4. 職業分類の統合

ここまでは、回答に書かれた職業をそのまま利用してきた。しかし、先にも書いたように、回答された職業数は非常に多く、そのまま分析を進めることは困難である。そこで、自由記述で非常に多岐にわたっていた職業カテゴリーを、15に統合した。このカテゴリー化に際しては具体的な職業名を書いたものだけでなく、「動物関係の仕事」といったように職業内容を記述した回答についても内容に即してカテゴリーに統合して分析に用いることとした。

【図表 -1-5】学年・性別の希望する職業（15 カテゴリー）

	男性				女性			
	小4	小6	中2	合計	小4	小6	中2	合計
スポーツ	55.5	43.0	30.5	43.9	5.6	5.2	4.2	5.1
教師	0.6	1.9	4.2	2.1	9.2	7.9	8.4	8.5
保育	0.3	0.4	1.5	0.7	7.8	12.0	17.8	12.1
医療・福祉	4.1	8.4	5.8	5.9	15.3	11.4	16.7	14.4
専門	6.9	9.1	6.6	7.5	3.3	4.7	7.3	5.0
調理・菓子	3.8	1.9	3.9	3.2	10.9	7.0	4.2	7.6
製造関連	5.6	10.6	16.2	10.5	0.3	0.3	0.7	0.4
タレント	3.1	2.7	6.9	4.2	11.7	11.4	11.5	11.5
作家・クリエイター	4.1	3.8	5.0	4.3	9.7	14.9	9.4	11.4
美容サービス	0.3	0.8	1.9	1.0	4.5	9.3	10.8	8.0
販売	7.2	4.2	2.7	4.9	11.1	4.4	1.4	6.0
動物関係	0.3	0.8	1.9	1.0	8.6	9.6	3.5	7.5
農林漁業	0.9	1.9	1.5	1.4	0.0	0.0	0.3	0.1
警察消防等	4.1	3.4	5.0	4.2	1.4	0.0	1.7	1.0
サラリーマン・公務	3.1	7.2	6.2	5.4	0.6	2.0	2.1	1.5
N	319	263	259	841	359	343	287	989

統合したものをカテゴリーの分布をみると、男子では、小4の55.5%と過半数が「スポーツ」系の職業を希望していることがわかる。小6でも「スポーツ」を希望するものが43.0%と多くなっているが、小4と比べれば減少している。また、「製造関連」を希望するものが10.6%とやや多くなっている。中2になると、「スポーツ」を希望するものは30.5%とさらに減少する。また、「製造関連」を希望するものが16.2%に尾増加する。

女子については、小4では「医療・福祉」が15.3%、「タレント」が11.7%、「美容サービス」が11.1%、「調理・菓子」が10.9%と多くなっているが、男子と比べると、分散する傾向が見られる。小6では「作家・クリエイター」が14.9%、「保育」が12.0%、「医療・福祉」が11.4%、「タレント」が11.4%となっており、「保育」や「作家・クリエイター」が増加している。中2では「保育」が17.8%とトップになり、「医療・福祉」が16.7%、「タレント」が11.5%、「美容サービス」が10.8%と、小6予知もさらに「保育」「美容サービス」を希望するものが増える。「タレント」については、人気は高いが、学年による差はあまりない。

このように、学年が進むとともに、希望する子どもが減少する職業カテゴリーは、男子では「スポーツ」「販売」である。女子ではパティシエなどの「調理・菓子」「販売」「動物関係」といった職業であった。一方、学年が進むとともに希望する子どもが増加する職業は、男子では「教師」「保育」「製造関連」がある。女子では「保育士」「美容サービス」といった職業がある。これらは、「夢」として上げられる職業が、現実的なものに変化していくと考えることができよう。

1.2.2. 量的指標からみる希望職業の男女差の変化

性別による職業の違いを量的に見る方法がいくつかある。ひとつは職業分布の男女差から指標化する非類似指数であり、他方はそれぞれの職業の女性比率を求める方法である。

それぞれ発展させた分析も多いが、ここではシンプルに、非類似指数¹と女性比率についてみていこう。非類似指数とは、男女の職域分離を見る指標として一般的なものであり、男女それぞれの職業分布の差から算出し、男女の職業分布が一致するためには、どれだけの男性または女性が職業を移動しなくてはならないかを示した数値である。この値が 100 であれば、男女の職業分布がまったく異なることを示し、0 であれば、男女の職業分布がまったく一致していることを意味している。では、実際に子どもたちが書いた希望する職業を、そのまま統合せずに用いた小分類と、15 カテゴリーに統合した職業分類の 2 つのタイプの分類カテゴリーについて、非類似指数を算出してみよう（図表 -1-6）。

【図表 -1-6】希望する職業についての非類似指数

	小4	小6	中2	学年計
小分類	76.53	77.13	67.57	70.63
15分類	65.03	63.04	51.71	59.72

算出された非類似指数をみると、小4では小分類で 76.53、15 分類でも 65.03 とかなり高い値となっている。この値は、2002 年の就業構造基本調査の大分類を用いて算出した非類似指数 28.4 と比べてもかなり高くなっており、子どもたちの希望する職業は、実際の職業分布における男女差よりも、男女差が大きいことがわかる。また、小6では、小分類では 77.13、15 分類は 63.04 と、小4とほとんど変わらない値となっている。すなわち、小4と小6の間では、希望する職業の分布の男女差はあまり変化していないと考えることができる。それに対して、中2をみると、小分類で 67.57、15 分類でも 51.71 と、小6と比べて非類似指数が約 10 ポイント低下している。すなわち希望職業の男女差がかなり縮小しているといえる。

次に、それぞれの職業が、どの程度男女に偏って希望されているかについてみていこう。学年別に、それぞれの希望職業について、女子の比率を算出したものが図表 -1-7 である。

¹ 算出のために用いる数式は $D = 1/2 \left| \frac{F_i}{F} - \frac{M_i}{M} \right| * 100$

F_i/F は女子の中で i 職を希望する者の比率 M_i/M は男子の中で i 職を希望する者の比率である。

【図表 -1-7】希望職業の女子比率

	女性比率			
	小4	小6	中2	学年計
スポーツ	10.2	13.7	13.2	11.9
教師	94.3	84.4	68.6	82.4
保育	96.6	97.6	92.7	95.2
医療・福祉	80.9	63.9	76.2	74.0
専門	35.3	40.0	55.3	43.8
調理・菓子	76.5	82.8	54.5	73.5
製造関連	5.3	3.4	4.5	4.3
タレント	80.8	84.8	64.7	76.5
作家・クリエイター	72.9	83.6	67.5	75.8
美容サービス	94.1	94.1	86.1	90.8
販売	63.5	57.7	36.4	59.0
動物関係	96.9	94.3	66.7	90.2
農林漁業	0.0	0.0	20.0	7.7
警察消防等	27.8	0.0	27.8	22.2
サラリーマン・公務	16.7	26.9	27.3	25.0
全体	52.9	56.6	52.6	54.0

この図表から、たとえば、男子が希望することの多いスポーツは、希望者の約9割が男子であることわかる。また「教師」をみると、小4では女子比率が94.3%と非常に高いが、中2になると68.6%と偏りを少なくしていることがわかる。

この図表 -1-7 から、女子比率を20%ごとに5段階に分けて、それぞれの段階に含まれる職業のカテゴリーの数をカウントしたものが図表 -1-8 である。また、それぞれのカテゴリーを希望する女子の比率を、女性比率のカテゴリーごとに合計した値もつけてある。女子比率が80%以上の職業カテゴリーは、希望者が極度に女子に偏っていると考えることができ、また20%以下の職業カテゴリーは、希望者が極度に男子に偏っている職業であると考えられる。女子比率が40-60%といった職業カテゴリーは、希望者の男女の偏りの少ない職業であると考えることができる。

【図表 -1-8】職業カテゴリーの女子比率の集計

		職業カテゴリー数				含まれる女子生徒の比率			
		小4	小6	中2	学年計	小4	小6	中2	年齢計
女性 比率	80-100%	6	7	2	4	57.1	72.0	28.6	27.6
	60-80%	3	1	5	4	31.8	11.4	49.5	53.4
	40-60%	0	2	2	2	0.0	9.0	11.5	10.9
	20-40%	2	1	3	2	4.7	2.0	5.6	2.5
	2-20%	4	4	3	3	6.4	5.5	4.9	5.6

図表 -1-8 をみると、女子比率が80-100%という女子に偏った職業は、小4で6、小6で7、中2で2と、小4、小6で多いが中2になると少なくなる。また、女子比率が0-20%という男子に偏った職業は小4で4、小6で4、中2で3と、これも中2でやや少なくな

っている。すなわち、極端に女子または男子に偏った職業は学年が中2になると、かなり減少する。一方、女子比率40-60%といった、あまり偏りのない職業は小4では0であったが、小6、中2では2つになっている。

以上の分析から、希望職業の分布の男女差とそれぞれの職業希望者の男女比のどちらをみても、小4の時点では男女差が大きく、男性は男性職、女性は女性の職業に偏った希望をしているが、中2になると、男女差はやや緩和され、男女の希望の偏りも、やや偏りの少ないものになっているようである。すなわち、総合的に見ると、子どもたちは、学年が進むにつれて、希望職業の男女差を縮小させていくと見ることができるだろう。

このことは、どのような意味を持つのだろうか。一つには、子どもたちが、ある職業を特定の性別に結びつけることをしなくなると考えることができる。すなわち、子どもたちが職業知識を得る中で、単純な男女という基準を手放していく可能性がある。また、もう一方では、子どもたちが成長するなかで、自分の性別にふさわしいとされていなくても、ある職業に就くことを希望するようになるという可能性もある。先にも示したように、実際の職業の世界における性別分離は、子どもの夢に比べればそれほど大きくない。であればこそ、特定の職業に就くのにふさわしい性別という考えが、実際の姿を目にする頻度が高まる中で、修正されていく可能性もある。その意味では、子どもたちは成長するにしたがって、かならずしも「女子は女子向き職業」「男子は男子向き職業」に単純に結びついていくのではないことがわかる。この点については、これまでに想定されてきた「性別役割の社会化」について、再考を迫る発見であるとも考えることができよう。

しかしその反面、全ての子どもたちが一様に職業と性別の結びつきを緩やかにしているのではないといえる結果も存在する。希望するものが一方の性別に偏っている職業カテゴリーは、中2の時点でも5つほどある。女性に特に偏っているものとして「保育」「美容サービス」があり、男性に偏ったものとしては「スポーツ」「製造」「農業」がある。そして、このうちの「保育」「美容サービス」や「製造」は、学年が進むにつれて、これらの職業を希望する子どもが増加しているのである。全体としては希望職種の男女差が縮小していく中で、これらの職業は性別との結びつきを強固に保ちつつ、希望者を増やしているのである。このことは、一部の子どもたちは、むしろ自己の性別にふさわしい職業としてのこれらの職業を希望するようになっており、それぞれの性別にふさわしいとされる進路を選ぶ方向に向かっているのである。

一方では性別の差は縮小しつつ、特定の職業については強固な性別との関連を残し、さらにそれを希望するものが増加するという意味では性別の差が拡大する。すなわち、子どもたちの希望職業という視点から見ると、学年とともに男女差が縮小するという方向と、拡大するという方向の二つの流れがあると考えることができる。

では次に、これらの職業を中心に、強固に性別と結びついた職業を希望するものがどのような子どもなのかを明らかにしていきたい。

1.3. 職業と将来イメージ

2節では、希望する職業の男女差が、全体としては縮小する一方で、「保育」「美容サービス」「製造関連」についてのみ、「保育」と「美容サービス」は女子に、「製造関連」は男子に特化されたままでその希望者が増加することが明らかとなった。すなわち、全体としては希望する職業の男女差を縮小する流れがあるなかで、これらの3つの職業を希望するものだけは、既存の性別と職業の結びつきを前提にして、自己をその性別にふさわしい職業にしようとしていると考えることができるのである。

そこで、3節では、この3つの職業について、それぞれの職業を希望する者たちがどのような特性を持っているのかを明らかにしていきたい。

1.3.1. 自己イメージと職業希望

まず最初に、希望する職業と自己イメージの関係をみていこう。問11および問12の自己イメージの中から将来の夢をもっているか、自己肯定感および自分の能力についての認知としてクラス内での人気、勉強、スポーツ、リーダーシップについての自己評価の項目と、希望する職業の関連をみていく。それぞれ、「そう思う」または「当てはまる」と回答したものの比率のみを掲載した。

【図表 -1-9】希望する職業と自己イメージの関連（性別％）

	将来の夢 や目標が ある	私には、 よいところ がたくさん ある	クラスで 人気があ るほうだ	クラスで 勉強がで きるほう だ	クラスで スポーツ ができる ほうだ	クラスで リーダー になるこ とが多い	N	
女子	スポーツ	84.0	18.8	18.0	22.0	64.0	16.0	50
	教師	91.7	18.5	3.6	23.8	21.4	20.2	84
	保育	84.0	4.3	5.0	5.8	19.2	10.0	120
	医療・福祉	85.7	16.8	12.7	16.9	26.1	19.0	142
	専門 調理・菓子	83.7	18.4	14.3	38.8	20.4	18.4	49
	製造関連	84.0	11.0	6.7	20.0	21.3	12.0	75
	タレント	75.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	4
	作家・クリ エーター	90.4	21.8	16.7	21.1	27.2	28.1	114
	美容サー ビス	79.6	9.1	5.3	18.6	14.2	14.2	113
	販売	81.0	10.1	7.6	10.1	20.3	12.7	79
	動物関係	81.4	19.3	11.9	23.7	22.0	6.8	59
	農林漁業	77.8	12.5	8.1	12.2	24.3	9.5	74
	警察消防 等	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	1
	サラリー マン・公	100.0	22.2	0.0	30.0	30.0	10.0	10
	全体	66.7	0.0	13.3	13.3	13.3	6.7	15
	全体	84.0	13.8	9.6	17.9	24.0	15.5	989
	*	*	**	***	***	*		

	将来の夢 や目標が ある	私には、 よいところ がたくさん ある	クラスで 人気があ るほうだ	クラスで 勉強がで きるほう だ	クラスで スポーツ ができる ほうだ	クラスで リーダー になるこ とが多い	N	
男子	スポーツ	92.3	18.6	19.2	22.0	66.1	17.9	369
	教師	72.2	22.2	22.2	27.8	22.2	22.2	18
	保育	66.7	0.0	0.0	16.7	16.7	0.0	6
	医療・福 祉	83.7	18.4	18.0	46.0	28.0	18.0	50
	専門 調理・菓 子	83.9	20.6	17.5	46.0	33.3	19.0	63
	製造関連	85.2	23.1	18.5	22.2	40.7	14.8	27
	タレント	81.8	8.0	11.4	13.6	23.9	10.2	88
	作家・ク リエーター	88.6	20.6	22.9	34.3	28.6	20.0	35
	美容サー ビス	83.3	25.7	16.7	30.6	11.1	11.1	36
	販売	100.0	0.0	12.5	0.0	37.5	0.0	8
	動物関係	75.6	17.5	19.5	17.1	46.3	7.3	41
	農林漁業	62.5	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	8
	警察消防 等	75.0	25.0	16.7	16.7	33.3	16.7	12
	サラリー マン・公	91.4	14.3	8.6	11.4	42.9	11.4	35
	全体	60.0	18.2	11.1	22.2	35.6	6.7	45
	全体	85.6	17.6	17.0	24.1	46.3	15.1	841
		***	n.s.	n.s.	***	***	n.s.	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表全体を見ると、男女ともに職業希望との結びつきが強い自己イメージは、「将来の夢や目標がある」「クラスで勉強ができる」「クラスでスポーツができる」といったものである。勉強ができる子どもたちは医療系の仕事や専門的な仕事を希望する傾向があり、スポーツができる子どもたちはスポーツ系の職業を希望する傾向があるというように、勉強やスポーツができるかできないかということが、職業希望に影響を及ぼしていることがわかる。

先の節の結果をうけて、女子の「保育」「美容サービス」希望者を見てみよう。「将来の夢や目標」に「そう思う」と回答するものは全体や他の職業と比べてもそれほど低い数値ではないが、「私には、よいところがたくさんある」という自己肯定感をみると、保育希望者では「そう思う」ものが4.3%とかなり低くなっている。美容サービス希望者でも10.1%とやや低い。また、「クラスで勉強ができるほうだ」という自己認識については、保育希望者は5.8%、美容サービス希望者は10.1%しか「あてはまる」と回答しておらず、やはり全体や他の職業と比べても低い評価をしている。「クラスで人気があるほうだ」や「クラスでリーダーになることが多い」なども「あてはまる」とするものが少なく、これらの職業を希望する女子は、全体自己に対する肯定的なイメージが持てていないことが多く、学業達成についてもやや否定的な自己イメージを持つものであると考えることができる。

一方、「製造関連」を希望する男子についてもみていこう。製造関連を希望する男子でも、

「将来の夢や目標がある」については「そう思う」と回答するものが多くなっており、それぞれの職業への希望が明確であると考えることができる、その反面、「勉強ができるほうだ」については、「あてはまる」と回答するものが少なくなっており、勉強についての自己イメージが低いことがわかる。

このように、「保育」「美容サービス」「製造関連」といった職業への希望は、勉強についての否定的な自己イメージと関連して形成されていると思われる。すなわち、自己についての認識で、自分が勉強が出来ないと考えているものが、「保育」「美容サービス」「生産」といった、性別との結びつきが非常につよい職業を希望するようになっているのである。ここからは、学校教育により適応できているであろう勉強の出来る子どもたちは、専門職やより男女差の少ない将来の希望職業をもっていると考えることができる。

勉強の出来る子どもたちは、より男女の差の小さい将来を描き、それが実現する可能性も高いことから、実際に男女差の小さい職業についていく可能性がある。一方、勉強を苦手とする子どもたちは、性別に偏った将来像を描き、実際に「女性的」「男性的」とされる職業についていく可能性が高いのである。学業達成と希望進路とジェンダーの関連は、このように複雑である。

1.3.2. 将来イメージと職業希望

では次に、将来どのようになりたいかについてと、希望する職業の関連をみていこう。

【図表 -1-10】将来イメージと希望する職業

		勉強ができる ようになり たい	大学に入っ て勉強した い	有名な高校 に入りたい	人のやくに たつ仕事が したい	好きなことを いかした仕 事がしたい	有名な会社 に入りたい	有名になり たい	えらくなりた い	N
女子	スポーツ	52.0	30.0	30.0	38.0	82.0	18.0	38.0	14.0	50
	教師	64.3	59.5	38.1	54.8	76.2	9.5	15.5	14.3	84
	保育	53.3	30.0	15.8	56.7	76.7	4.2	9.2	4.2	120
	医療・福祉	60.6	46.5	29.6	81.0	50.7	8.5	15.5	7.7	142
	専門調理・菓子	63.3	67.3	34.7	46.9	71.4	14.3	16.3	12.2	49
	製造関連	49.3	32.0	28.0	38.7	72.0	9.3	21.3	6.7	75
	タレント	50.0	0.0	0.0	25.0	50.0	0.0	0.0	0.0	4
	作家・クリエイター	50.9	43.9	36.0	33.3	84.2	16.7	45.6	15.8	114
	美容サービス	51.3	32.7	23.0	27.4	92.0	12.4	22.1	8.8	113
	販売	54.4	29.1	22.8	51.9	78.5	15.2	19.0	7.6	79
	動物関係	62.7	28.8	37.3	47.5	61.0	11.9	25.4	15.3	59
	農林漁業	45.9	29.7	17.6	52.7	82.4	5.4	10.8	6.8	74
	警察消防等	100.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	1
	サラリーマン・公	70.0	60.0	60.0	80.0	40.0	10.0	10.0	20.0	10
	全体	66.7	46.7	46.7	33.3	33.3	26.7	6.7	13.3	15
	検定	55.4	39.0	28.2	49.7	73.7	11.0	20.9	10.0	989
		n.s.	***	***	***	***	n.s.	***	*	

		勉強がで きようにな りたい	大学に入 って勉強し たい	有名な高校 に入りたい	人のやく にたつ仕事 がしたい	好きなこと をいかした 仕事がしたい	有名な会社 に入りたい	有名にな りたい	えらくなり たい	N
男子	スポーツ	41.7	19.2	38.8	29.8	63.7	13.6	40.9	12.7	369
	教師	61.1	44.4	27.8	72.2	77.8	22.2	38.9	16.7	18
	保育	33.3	33.3	33.3	66.7	83.3	0.0	33.3	16.7	6
	医療・福 祉	52.0	58.0	40.0	74.0	32.0	22.0	28.0	14.0	50
	専門 調理・菓 子	58.7	49.2	47.6	54.0	69.8	22.2	33.3	31.7	63
	製造関連	55.6	29.6	11.1	51.9	81.5	3.7	18.5	7.4	27
	タレント	45.5	20.5	23.9	39.8	77.3	26.1	14.8	18.2	88
	作家・クリ エーター	54.3	34.3	37.1	31.4	54.3	20.0	65.7	22.9	35
	美容サー ビス	44.4	33.3	22.2	30.6	91.7	13.9	22.2	5.6	36
	販売	50.0	12.5	25.0	25.0	50.0	12.5	37.5	37.5	8
	動物関係	56.1	31.7	26.8	51.2	75.6	29.3	31.7	24.4	41
	農林漁業	25.0	25.0	0.0	25.0	62.5	12.5	0.0	0.0	8
	警察消防 等	8.3	0.0	0.0	33.3	50.0	0.0	8.3	16.7	12
	サラリー マン・公	57.1	34.3	34.3	62.9	51.4	5.7	25.7	20.0	35
	検定	62.2	40.0	33.3	37.8	48.9	33.3	15.6	24.4	45
	全体	47.3	28.2	33.9	40.1	64.4	17.4	32.9	16.5	841
	検定	*	***	**	***	***	**	***	*	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

この表からも、将来のイメージと希望する職業の間にも関連があることがわかる。職業の内容によっては、大学進学が必要条件となる職業もあるため、進学に関する将来イメージと職業の関連が想定されるが、男女ともに有意な関連があることがわかる、また、「人の役に立つ」「好きなことをする」「有名になる」といった将来イメージについても、「人の役に立つ」であれば「医療・福祉」や「保育」「教師」といった職業を希望するものが多く、「自分の好きなことをする」については「作家・クリエイター」を志望するものが多いといったように、将来イメージと希望する職業の関連が診られる。

前節から注目している「保育」「美容サービス」「製造」についてみると、「保育」を希望する女子については高校や大学への進学意欲が低く、「人の役に立つ」将来をイメージしていることが多い。「美容サービス」を希望する女子については、大学進学への希望が低い点が顕著である。また、「製造関連」を希望する男子については、大学や有名な高校への進学動機が低く、「自分の好きなことをする」「有名な会社に入る」といった将来像を持つものが多い。すなわち、これらの職業を希望するものは、先の学業に関する自己評価が低いことと関連して、進学への意欲が比較的低いことが言えるだろう。その一方で、「人の役に立つ」ことなど、それぞれの職業のイメージにあった将来像を描いていることもわかる。

1.3.3. 女性のライフコースについての考え方と職業希望

最後に、ジェンダーに関する考え方として、どのような考えを持っているのかが、希望する職業とどのような関連を持つかについても検討しておこう。今回の調査では、生徒に

対して性別役割分業についての考えを直接聞いたものはないが、「女性が働くことについてどう考えるか」という設問がある。この設問は、女性が働くことの是非ではなく、特に継続するかどうか、中断した場合に再就職するかどうか、そして中断するタイミングなどをあわせた女性にとって望ましいライフコースを尋ねる設問となっている。この項目についての解答を「継続」「中断」「再就職」「非就労」「わからない」の5つのカテゴリーに統合して希望する職業との関係を見たところ、両者の関係が統計的に有意なのは、中2の女子だけである。このことは、中学2年ごろになると、女子については「一般的な女性の生き方」が自分の職業選択と結びついて考えられるようになる可能性を示しているのではないだろうか。

そこで、中2の女子について、希望と職業の関連を見ると、以下の図表の通りとなった。

【図表 -1-11】希望する職業と女性の生き方についての考え方（中学2年女子のみ）

	継続	再就職	中断	わからない
スポーツ	25.0	66.7	8.3	
教師	37.5	41.7	8.3	12.5
保育	23.5	35.3	27.5	13.7
医療・福祉	36.2	34.0	17.0	12.8
専門	28.6	33.3	14.3	23.8
調理・菓子	8.3	41.7	41.7	8.3
製造関連			100.0	
タレント	51.5	30.3	9.1	9.1
クリエイター	33.3	33.3	25.9	7.4
美容サービス	16.1	41.9	19.4	22.6
販売	75.0			25.0
動物関係	20.0	50.0	10.0	20.0
農林漁業	100.0			
警察消防等	60.0	40.0		
サラリーマン・公務		100.0		
	30.8	38.1	18.2	12.9

この表から見ると、継続することをよしとする考えを持つ女子は「タレント」「医療・福祉」「教師」を希望するものに多いことがわかる。それに対して「再就職」「中断」をよしとする考えを持つ女子は「保育」「美容サービス」などに多く見られるようである。近年、活躍する女性芸能タレントの多くが結婚や出産を経て活躍し続ける姿が多く見られることなども、継続を肯定するものにタレント希望者が多くなる傾向が見られる。

また、先の節との関連で、特に学年とともに増加する「保育」「美容サービス」に注目すると、継続すべきだと考えている者が少なく、結婚や出産で就労を一時中断することを肯定するものが増えている。すなわち、女子の職業と考えられるこれらの職業を志向するものは、女子の中でも、継続志向の弱いものであると考えることができよう。

これらの結果から、2節で明らかにした「女性職」「男性職」へと流入する層が、学業的な自己イメージが低い反面、夢や目標を明確に持っているそうであることがわかる。ま

た、ポジティブな将来像を描けず、進学意欲も低くなっている。また、女性の生き方については、継続することに価値を行い事であると思われる。

1.4. まとめ

さて、本稿の分析から明らかになったことをまとめておこう。まず、子どもたちが希望する職業について

さらに、希望する職業の男女差について分析を進めると、小4および小6では希望する職業の男女差が大きかったが、中2になると、その差が縮小し、男女の方よりも小さいものになることがわかった。すなわち、男女で明確に分かれていた希望職業が、やや男女の差があいまいになり、性別にとらわれない進路選択をするものが増えていると考えることができる。しかしその反面、「保育」「美容サービス」「製造」については、男女の比率が非常に偏った職業のままであり、しかもこれらの職業を希望するものが小4から中2にかけて一貫して上昇することから、女性的な職業を選択するようになる子どもたちも一定程度存在することが明らかになった。

さらに、自己イメージや将来イメージなどから、保育や美容サービス、製造といった職業を希望するものの特徴をみたところ、主に学業についての自己イメージが低いと同時に夢や目標がはっきりしていることが、また将来イメージとの関連では進学意欲の低さが顕著であることがわかった。また、女性のライフコースについての考え方については、中断や再就職を是とするものが多く、継続するべきだと思えるものが少なくなっていた。このことから、学校内での学業成績によって、希望する職業とジェンダーの結びつきが異なると考えることができる。すなわち、勉強が苦手だと感じている子どもたちは、自身がより積極的に、保育や美容サービスといった、非常に女性に偏った職業を希望するのに対し、学業達成についてそれほど不安のない勉強のできる子どもたちは、むしろ男女の偏りの少ない職業を希望するのである。このように、職業希望とジェンダーは単純に結びついているのではなく、学業成績（についての自己イメージ）に媒介されながら結びついていられるのではないだろうか。その際、特に学校において不利とされる勉強を苦手とする子どもたちの将来が、よりジェンダーに囚われたものとなる可能性がある点については、今後、実践においても重要な問題となると思われる。

今回の調査では、子どもたちの実際の学業成績などについては聞いておらず、ここで示したような希望職業とジェンダーと学業成績との関連は、厳密には検討できなかった。今後、より詳細な形で検討を行い、子どもたちがどのように職業世界に移行していくのかを検討していくことは、さらに必要な課題となるだろう。

【参考・引用文献】

深田昌志他 2003 『「元気な女の子」と「ほどほど志向の男の子」』モノグラフ・中学生の

世界 vol.73。

荻谷剛彦 1986 「閉ざされた将来像 - 教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』第 41 集、pp.95-109.

木村涼子 1999 『学校文化とジェンダー』勁草書房。

小谷麻子 1998 「高校生におけるジェンダー・ハビトゥスと男女の意識差」尾嶋史章研究代表者『現代高校生の進路と生活、その構造と変容』平成 8～9 年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.77-89.

工藤保則・阿形健司・山根マリ 2003 「地域性とライフコース展望 - 中学生の「職業意識」「ジェンダー意識」を手がかりにして」『仁愛大学研究紀要』、pp.27-40.

工藤保則他 2003 『中学生の進路と生活』平成 12～13 年度科学研究補助金（奨励研究 A）研究成果報告書。

中西祐子 1998 『ジェンダー・トラック - 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版。

日本労働研究機構 2001 『中学生・高校生の職業認知』資料シリーズ No.112。

----- 2003 『小学生の職業意識とキャリアガイダンス』資料シリーズ No.138。

下村英雄 2005 「『プロスポーツ選手』と子供の職業認知」『日本労働研究雑誌』No.537 pp.70-72.

寺崎里水・中島ゆり 2005 「小・中学生の『やりたいしごと』」『JELS 第 4 集 細分析論文集（1）』御茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達科学専攻 COE、pp.43-75.

寺崎里水 2006 「『好き』を入り口にするキャリア教育の限界 - 子供のやりたい『しごと』をめぐって」関東社会学会『年報社会学論集』第 19 号、pp.95-106.

姫岡とし子 2004 『ジェンダー化する社会 - 労働とアイデンティティの日独比較史』岩波書店。

首藤若菜 2003 『統合される男女の職場』勁草書房。

2．自己像、将来像とジェンダー経験

直井道子

2.1. 問題

先に であきらかになったように、子ども達の自己像、将来像には男女差が見られる。要約すれば、将来大学で勉強したい、と考える子は女子の方がどの学年でも男子より高くなっていた。また将来、人の役に立つ仕事がしたいという比率も女子の方が男子よりも高かった。さらに将来の夢や希望があるかという問いに「はい」と答えた比率は女子方がやや高く、しかも年齢が上がるにつれて男女差は大きくなっていた。我々は調査の実施前には男子の方が女子よりも大学に進学し、社会で活躍する将来を夢見て、積極的な将来像を持っているだろうと考えていた。ところが、むしろ反対の様相がみてとれたということになる。

そこでどうして、このような自己像、将来像の男女差が出てきたのだろうか、という疑問が出てくる。これを全面的に解明することは容易ではないが、この調査の中で得られたどのような変数と関連しているのかを追究することによって、何らかのヒントを得るのが本稿での目的である。

まず検討してみるのは家庭での経験の影響である。すでに で述べられているように、子どもたちはまず家庭でいろいろなジェンダー的经验をする。たとえば女子は男子よりより家事の手伝いを頼まれるとか、女の子なのだから行儀よくしなさいと叱られるとか、である。また両親が共働きかどうか、ということも子どもの自己像や将来像に影響を与えるかもしれない。

本章ではこうした視点から自己像、将来像について家庭でのジェンダー経験との関連をみていくことにする。

2.2. 家事手伝いと自己像、将来像

すでに、 -6 で、家事手伝いは8つの家事項目のうちの手伝っている項目数で比較すると女子の方が男子より多いこと、部屋の掃除以外はどの手伝いも学年が上がると共に手伝いの比率が下がることが指摘された。ここでは、これらの家事手伝いと自己像、将来像との関連を見ていく。

そのための手続きとして、すでに -6で行ったと同様に、手伝いについて聞いた9つの質問のうち、「その他」をのぞく8項目のうちどれだけの項目のお手伝いをしているかの数によって尺度化した。信頼性係数 α は0.6946で、尺度として使ってもよいと思われる。これを手伝い数2個までを「普通（以下）」3個から4個を「やや多い」5個以上8個までを「多い」として手伝い数の3つのグループに分けた。そして手伝いの多さと「自分にはよいところがある」の関連をみたのが図表 -2-1である。

男子も女子もお手伝いの多いほうが「自分にはよいところがある」と考える比率が高い。

図表 -2-2 は同じくお手伝いの3分類と「将来の夢や目標がある」のクロス表である。男子も女子も手伝いが多い方が将来の夢や目標があることがわかる。

【図表 -2-1】性別 手伝いの多さ別 自己像 私にはよいところがたくさんある(%)

	手伝い数	合計(人数)	私にはよいところがたくさんある			χ ²
			はい	どちらともいえない	いいえ	
男子	普通	100(754)	11.7	67.5	20.8	***
	やや多い	100(345)	13.3	67.5	19.1	
	多い	100(238)	23.9	63.0	13.0	
	合計	100(1337)	14.3	66.7	19.0	
女子	普通	100(603)	9.3	66.5	24.2	**
	やや多い	100(374)	13.9	68.7	17.4	
	多い	100(295)	15.3	70.5	14.2	
	合計	100(1272)	12.0	68.1	19.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

【図表 -2-2】性別 手伝いの多さ別自己像 将来の夢や目標がある(%)

	手伝い数	合計(人数)	将来の夢や目標がある			χ ²
			はい	どちらともいえない	いいえ	
男子	普通	100(768)	63.7	23.6	12.8	*
	やや多い	100(350)	70.6	18.6	10.9	
	多い	100(242)	73.1	17.4	9.5	
	合計	100(1360)	67.1	21.2	11.7	
女子	普通	100(618)	66.8	19.7	13.4	***
	やや多い	100(380)	76.6	15.5	7.9	
	多い	100(300)	80.0	13.7	6.3	
	合計	100(1298)	72.7	17.1	10.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

さらに、手伝いの多さと達成意欲を示す項目との関連を見てみたい。具体的には「大学に入って勉強したい」「有名な会社に入りたい」「勉強ができるようになりたい」、「有名な高校に入りたい」「人の役に立つ仕事がしたい」「有名になりたい」について、「はい」と答えた比率だけをとって一つの表にまとめたのが表 -2-3 である。「えらくなりたい」だけは手伝いが「普通 以下」と「やや多い」の違いが男女ともはっきりしないが、おおむね、お手伝いが多い子ほど、男女共に有意に達成意欲が強いといえる。

【図表 -2-3】性別 達成意欲の 7 項目「はい」の比率(%)

	手伝い数	合計	大学に入 って勉強 したい	有名な会 社に入り たい	勉強がで きるよう になりた い	有名な高 校に入り たい	人の役に たつ仕事 がしたい	有名にな りたい	えらくな りたい
男子	普通	100.0(781)	23.2	14.5	42.5	26.2	33.0	22.5	12.8
	やや多い	100.0(353)	26.3	15.3	49.0	29.7	41.1	24.9	12.7
	多い	100.0(243)	35.8	26.7	52.3	38.7	47.3	34.6	22.2
	合計	100.0(1377)	26.2	16.8	45.9	29.3	37.6	25.3	14.5
	χ^2		***	***	*	**	***	**	**
女子	普通	100.0(623)	29.5	7.2	50.1	19.7	41.3	14.1	7.9
	やや多い	100.0(381)	40.4	12.6	53.3	26.8	50.4	19.2	7.9
	多い	100.0(301)	38.2	13.3	62.5	33.6	60.1	27.9	12.6
	合計	100.0(1305)	34.7	10.2	53.9	25.0	48.3	18.8	9.0
	χ^2		**	**	**	***	***	***	*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

2.3. 家庭の雰囲気との関連

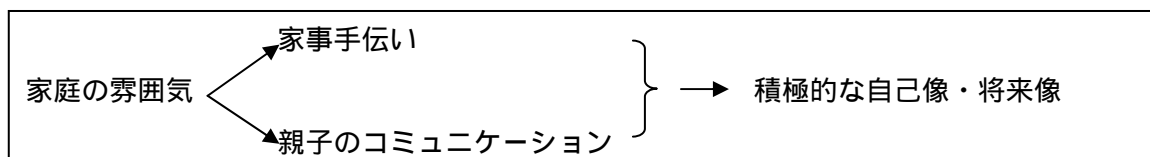
さて、家事手伝いの多さはなぜ積極的な自己像、将来像と関連するのだろうか？このことには二つの解釈があると思われる。一つはお手伝いの経験そのものが自信や自尊心を深め、積極的な自己像や将来像にむすびつくということが考えられる。自分でもやれる、人の役に立ったという経験は自信を深め、さらに積極的な自己像を描くとしても不思議ではない。また手伝いの機会に親とのコミュニケーションが促進されたり、そこでほめられたりといったことも効果を生むのかもしれない。図式化すると次のようになる。

【図表 -2-4】

家事手伝い → 自信 → 積極的な自己像、将来像

もう一つは「家事手伝いをさせることも積極的な自己像や将来像も家庭の雰囲気」から生まれるという解釈もありうる。親がある程度教育熱心だったり、熱心にこどもとかかわり、本を読んでやったり、勉強を教えたりする家庭では、家事もしつけの一種としてこどもにやらせているのではないか。そのような子どもへの働きかけが積極的な自己像や将来像を生むということも考えられる。この場合は家事手伝いが直接積極的な自己像につながるのではなくて、そのような家庭の雰囲気が積極的な自己像につながると考える。図式化すると図表 -2-5 のようになる。

【図表 -2-5】



そこで、今度は -6 でみた「家庭の雰囲気」という質問群が家事手伝い、積極的将来像、自己像どう関連するのかをみていきたい。

そこで家庭の雰囲気について聞いた図表のような質問群 5 項目について、「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」別に家事手伝い点数の平均点を男女別にとったところ、図表 -6 のようだった。

【図表 -2-6】性別×「家庭の雰囲気」別家事手伝い点数の平均点

		よくある	ときどきある	ほとんどない	χ^2
男子	家の人はテレビでニュースをよくみる	2.60	2.34	2.86	-
	家の人と博物館や美術館へ行く	3.36	2.87	2.74	***
	家族で旅行に行く	2.96	2.47	2.82	***
	家の人に勉強を見てもらう	3.00	2.50	2.58	***
	小さい時に家の人に本を読んでもらった	2.78	2.38	2.79	**
女子	家の人はテレビでニュースをよくみる	3.07	2.56	2.86	***
	家の人と博物館や美術館へ行く	3.93	3.30	2.74	***
	家族で旅行に行く	3.33	2.85	2.82	***
	家の人に勉強を見てもらう	3.32	3.03	2.58	***
	小さい時に家の人に本を読んでもらった	3.16	2.62	2.79	***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

分散分析で、男子の「家の人はテレビでニュースを見る」以外のすべての項目で有意差が見られた。また男女とも「家の人はテレビでニュースを見る」「小さいとき、家の人に本を読んでもらった」の2項目では「ほとんどない」ほうが「ときどきある」より家事手伝い数の平均が高い。この点を除けば、大体において家庭の雰囲気子どもと密接にかかわっているほど、家事手伝い数の平均が高い。例外となった二つの項目はともに「よくある」に回答が集中しているために、平均点の差が有意に出にくかった可能性もある。しかし、すべての項目において「よくある」の平均点は「ほとんどない」よりも高くなっている。

これらのことから、大まかに言えばこの調査で調べた5項目の家庭の雰囲気と家事手伝い数には関連があり、親と子どもが密接にかかわっている家庭では家事手伝いが多いといえそうである。これは先にあげた二つの仮説のうち後者を示唆するところがある。しかし、これだけでは家事手伝いそのものの効果がないとはいえないので、家庭の雰囲気、家事手伝い3区分、自己像や将来像の三重クロス表をとり、同様な家庭の雰囲気の人々の中で（家庭の雰囲気をコントロールして）も家事手伝いが自己像や将来像と関連があるかどうかを調べた。5つの家庭の雰囲気について三段階にコントロールした中で家事手伝いと二つの自己像と将来像について各15個の三重クロス表がえられたが、「私にはよいところがある」については15個の検定のうち8個、「将来の夢や希望がある」については15個の検定のうち9個で有意な差異が見いだされた。すべての表を掲載することは煩雑に過ぎるので図表-2-7に一つだけ掲載しておく。

この表をみると、家の人に勉強を見てもらうことが「よくある」人も「時々ある」人も「ほとんどない人」も家事手伝いが多い人の方が「将来に夢や目標がある」ことがわかる。その比率は勉強を見てもらうことが「よくある」人「時々ある」、「ほとんどない」の順に低くなってくる。すなわち、家庭の雰囲気も家事手伝いの多さも両方が「将来に夢や目標がある」と関連していることが分かる。有意な関連が見られなかった場合の多くは、そのカテゴリーに含まれる人が少ない場合であった。

【図表 -2-7】家の人に勉強を見てもらう頻度×手伝いの多さ×将来の夢や目標(%)

家の人に勉強を見てもらう	手伝い数	合計	将来の夢や目標がある			χ ²
			はい	どちらとも いいえ	いいえ	
よくある	普通以下	100.0(294)	74.8	16.7	8.5	-
	やや多い	100.0(202)	80.7	11.4	7.9	
	多い	100.0(179)	82.1	13.4	4.5	
	合計	100.0(675)	78.5	14.2	7.3	
ときどきある	普通以下	100.0(508)	68.5	21.1	10.4	*
	やや多い	100.0(305)	75.7	16.7	7.5	
	多い	100.0(202)	78.2	16.8	5.0	
	合計	100.0(1015)	72.6	18.9	8.5	
ほとんどない	多い	100.0(538)	55.2	25.8	19.0	**
	やや多い	100.0(219)	64.4	22.4	13.2	
	多い	100.0(157)	70.1	14.6	15.3	
	合計	100.0(914)	60.0	23.1	17.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

次に達成意欲にかかわる 5 項目についても同じように 3 重クロス表をとってみた。中で最も家事手伝いによって有意な差異が見られたのは「人の役に立つ仕事がしたい」で、15 個のクロス表のうち 11 個で有意な関連が見られた。その中の一つを図表 -2-8 に示した。

以上をまとめると次のように言える。たしかに自己像、将来像、達成意欲について、家庭の雰囲気と家事を多く手伝うこととの双方が関連しているといえそうである。ここで家庭の雰囲気といったものは、一つの尺度を構成しなかったので、何を表現しているのかを特定することは難しい。調査をする側としては何らかの階層や親の学歴を代替する変数として導入したのであるが、親の教育熱心さ、子どもとのコミュニケーションの多さといった多様な要素を含んでいるといえそうである。ここでいえることは家事手伝いの多さそれ自体はおそらく子どもの達成感、有用感などを通じて自信を生み、積極的な自己像や将来像と関連しているが、それと同時に家事手伝いをさせるという親の教育的配慮なども影響をしているだろう、ということである。

なお、母親が有職か否かと将来像や自己像についてはほとんど関連が見られなかった。

【図表 -2-8】家の人はテレビでニュースを見る頻度×手伝いの多さ×人の役に立つ仕事
(%)

家の人はテレビで ニュースを見る	手伝い数	合計	人のやくにたつ仕事をしたい		χ^2
			あてはまらない	あてはまる	
よくある	普通以下	100.0(454)	56.4	43.6	***
	やや多い	100.0(313)	50.5	49.5	***
	多い	100.0(249)	39.0	61.0	***
	合計	100.0(1016)	50.3	49.7	
ときどきある	普通以下	100.0(140)	63.6	36.4	-
	やや多い	100.0(58)	48.3	51.7	-
	多い	100.0(45)	37.8	62.2	-
	合計	100.0(243)	55.1	44.9	**
ほとんどない	普通以下	100.0(14)	64.3	35.7	-
	やや多い	100.0(7)	42.9	57.1	-
	多い	100.0(7)	85.7	14.3	-
	合計	100.0(28)	64.3	35.7	

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

2.4. 考察と結論

以上から結論的に次のようなことがいえる。家庭で子どもに家事を手伝わせることは、そのことを促進するような家庭の雰囲気、たとえば教育熱心だったり、親自身が社会のことに関心をもっているなどのこととあいまって、子どもに積極的な自己像や将来像をもたせることに寄与している。そして家庭では女の子の方が家事手伝いをさせられることが、むしろ女の子の積極的な自己像や将来像に貢献しているように見える。逆に言うと、男の子があまり家事手伝いをしないことが、女の子と比較して積極的な自己像や将来像をもちにくい一因となっているかに見える。ただし、家事手伝いだけですべてが説明できたとは到底考えられない。今後の課題として、お手伝い以外にもっと家庭や学校での子ども達の経験のジェンダー差と自己像、将来像と関連する要因を発見し、とくに男の子たちが積極的な自己像や将来像をもてないでいるのはなぜか、という事をもっと探っていく必要がある。ジェンダー平等戦略として、学校で男の子が積極的な将来像を持てる工夫が必要だということになるのかもしれない。

一方、女の子については、小、中学校段階でせっかく将来の夢を描いても、また自己に自信がもてても、上級学校の進学、学校から外に出て就職するとき、その後仕事をする過

程で何を任されるかなどの段階では実はまだまだいろいろな不平等があるのが現実であろう。せっかくの積極性が冷却されていっている恐れがある。雇用の男女不平等についてはすでに多くの調査があるが、中学卒業から就職までの段階で、女の子たちがどういう状況で自己を変容させてしまうのか、高校教育や就職指導、就業先の人事システムでどういう戦略が女の子の積極性を継続させ花開かせるのかについては今後の大きな研究課題だといえよう。

3．教師と子どものとらえ方の違い

大竹美登利

3.1. はじめに

この調査は教師と児童・生徒（以下「子ども」と記す）に同じような質問項目を尋ね、ある場面や意識に関して、教師の側からのとらえ方と子どもの側からのとらえ方を対にして比較できるようになっている。本章では、その項目を取り出して、教師側からの見方と子どもの側からの見方の違いを明らかにすることを目的とする。

設問項目のワーディングなどは、教師対象調査と子ども対象の調査と異なる。例えば、「1-2 教師との話しやすさ」では、教師の調査で「問3 あなたのクラスについて、次のようなことをどのくらい強く感じていますか。当てはまるものに○をつけて下さい」としてたずねた7つの質問項目のひとつに、「(7)子どもたちは何でも話してくれる」があり、「1. とてもそう思う、2. 少しそう思う、3. あまりそう思わない、4. 全くそう思わない」の4つの選択肢から回答してもらっている。子どもには「問8 あなたの担任の教師について当てはまるものすべてに○をつけてください」として、11の選択肢が並んでいて、該当するものに○をつける。そのうちの1つの選択肢である「4. 教師には何でも話せる」に○をつけた子どもたちが、教師と話しやすいと考えていると捉え、教師の側のデータと並べて比較した。このように、教師と子どもを対比して比較した項目は、すべて設問方法が相違する。

また、対象者は小学校児童4年生と6年生、中学校2年の児童・生徒、小・中学校教員をそれぞれ200名前後調査することを目標に実施したので、教員調査は地域の大半の学校に在籍する教員が対象になっているが、児童生徒は数校に在籍する児童・生徒にとどまり、調査対象の教員の直接の教育対象の児童生徒全員ではない。

ワーディングの相違、対象者のずれなどから、両者の結果を直接的に比較はできないが、一定の傾向を読み取ることはできると考え、以下に、対比による教師と子どもの見方の違いをみることにする。

図表 -3-1 に示す質問項目が、ここで取り上げる教師と子どもの両方に類似する質問をした項目である。これらを、1. 教師との話しやすさ、2. 教師からの注意、3. 教師の指導、5. 男女の特性、6. 男女の性格の6つの節にわけて結果を述べる。

なお、男女別によって回答の割合に相違があったが、地域別では相違が見られなかった。そこで以下では、男女別の相違のみを取り上げ、地域別は取り上げない。

【図表 -3-1】比較対象項目

	教師	児童・生徒（子ども）
教師との話しやすさ	問3 あなたのクラスについて、次のようなことをどのくらい強く感じているか（4択：そう思う） (7)子どもたちは何でも話してくれる	問8 あなたの担任の先生について、あてはまるものすべてに。 (4)先生には、何でも話せる
	問6 次のことについて、子どもたちによく注意することはありますか（女に対して、男に対して） 1 忘れ物 2 言葉遣い 3 清潔・身だしなみ 4 整理整頓 5 家の手伝い 6 食べ方・座り方 7 帰宅時間 8 子どもたちが頑張らなかった時 9 友だちと仲良くしなかった時 10 泣いた時	問10 あなたは次のことについて注意されることはありますか（先生から） 忘れ物 言葉づかい（話しかた） 清潔・身だしなみ 整理せいとん 手伝い 食べ方や座り方 家に帰る時刻 一生懸命がんばらなかったとき 友だちと仲良くしなかったとき 泣いたとき
教師の指導	問8 子どもたちにどのように接しているか？（5択：女・男の方） (1)授業で指名することが多いのは (2)つい、厳しく叱ってしまうのは (4)休み時間などに話しかけることが多いのは (7)仕事を頼みやすいのは	問6 授業中のあなたのようすについて、あてはまるものすべてに。 (2)授業中、先生にあてられる事が多い (3)先生から、叱られる事が多い (4)先生から、話しかけられる事が多い (5)先生から、仕事を頼まれる事が多い
	問9 あなたが授業をしているクラスの子どもたちについて（5択：女・男の方） (1)教室で偉そうにしているのは (2)意見がよく通るのは (4)リーダーになるのは (5)授業でよく発言するのは	問5 あなたのクラスで次のことはどんなようすか（3択：女・男の方） (2)教室でえらそうにしているのは (3)意見がよく通るのは (6)リーダーになるのは (1)授業でよく発言するのは
男女の特性	問9 あなたが授業をしているクラスの子どもたちについて（5択：女・男の方） (8)勝ち負けにこだわるのは (9)グループで行動するのは (10)教師の言うことを素直にきくのは (11)反抗的なのは	問11 あなたには、次のことがらがどのくらいあてはまるか。（3択：はい、どちらとも、いいえ、） (4)勝ち負けにこだわるほうだ (7)グループで行動するほうだ (8)人の言うことを、すなおにきくほうだ (9)反抗的なほうだ

3.2. 教師との話しやすさ

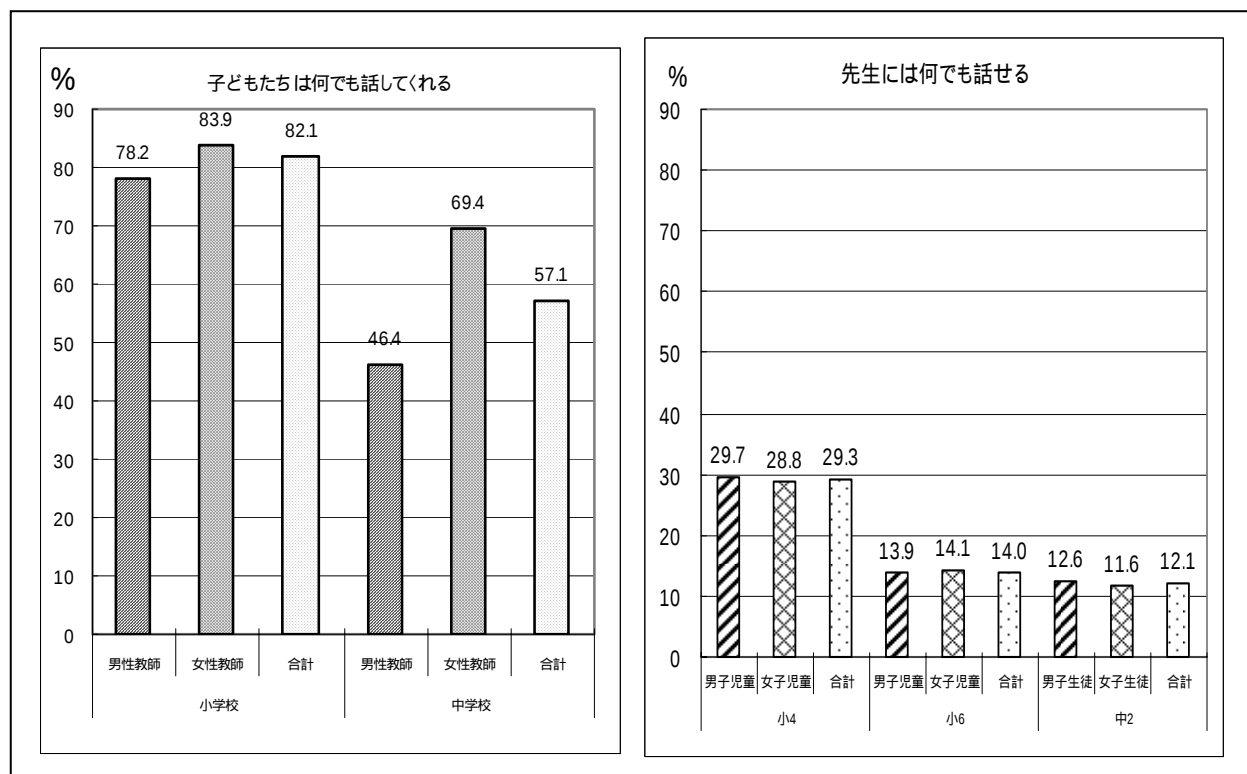
教師側のデータは、「あなたのクラスについて、次のようなことをどのくらい強く感じているか」として回答を得る7つの項目の一つである「(7)子どもたちは何でも話してくれる」について「1.とてもそう思う、2.少しそう思う、3.あまりそう思わない、4.全くそう思わない」の4つの選択肢から回答してもらったうち、「1.とてもそう思う」「2.少しそう思う」と回答した割合の合計を、「子どもたちは何でも話してくれる」と考えている教師の割合として使用した。子どものデータは、「あなたの担任の先生についてあてはまるものすべてに。をつけてください」という質問で、「4.先生には何でも話せる」に。をつけた割合を使用している。

図表 -3-2 に示したように、教師では、小学校で約 8 割の教師が、中学校で約 6 割の教師が、子どもたちは何でも話してくれると思っている。しかし、子どもでは、「先生には何でも話せる」と回答した者の割合は、小学生で約 3 割、中学生で約 1 割にとどまり、教師の側からのと 8 割、6 割と比較すると大きく下回る。すなわち、教師が「子どもたちは何でも話してくれる」と思っているほどには、子どもは教師に何でも話しているわけではない。

なお、男女別でみると、中学校教師の場合、男性教師で約 5 割、女性教師で約 7 割と、女性教師の方が「子どもは何でも話してくれる」と思っている。小学校教師も、中学校教師ほどではないが、女性教師の方が「子どもたちは何でも話してくれる」と思っている。一方、子どもは、男女に大きな相違はない。

様々な指導、支援活動には、教師と子どもとの十分なコミュニケーションが重要である。しかし、教師側は十分にコミュニケーションが取れているとの前提で子どもと接し、しかし、子ども側は必ずしも十分に教師とコミュニケーションを取っていると思っていない場合、教師からの指導や支援が十分に伝わらない場合もあり得る。子どもたちは教師が思っているほどに何でも話していないという認識のずれを意識しておくことは、重要であろう。女性教師は、男性教師よりいっそう、こうした子どもとの認識の相違を念頭に、今後の指導にあたる必要があるだろう。

【図表 -3-2】教師と児童・生徒間のコミュニケーション関係の違い



3.3. 教師からの注意の受け取り方の相違

ここでは、教師のデータとして、「問 6 次のことについて、子どもたちによく注意することはありますか。まず、女子に注意するものすべてに○をつけ、次に、男子に注意するものすべてに○をつけて下さい。」との質問に、選択肢が 11 並んでおり、そのうち、「11 当てはまるものはない」を除いた 10 の選択肢を取り上げた。「女子に対して」の欄に○をつけたもの、「男子に対して」の欄に○をつけたものを、教師が女子に対して注意する、男子に対して注意するとして用いた。子どものデータは「問 10 あなたは次のことについて、注意されることはありますか。まず家の人から注意されるものすべてに○を書いてください。次に、教師から注意されるものすべてに○を書いてください」という設問で選択肢が 12 並んでおり、そのうち教師への設問と同様の内容の 10 の選択肢について、家の人からと先生からに分けて○を書いてもらったもののうち、「先生から」の欄に○をつけたものを、回答者の男女別で集計した結果を用いた。

教師と子どもたちの受け取り方の違いは、双方とも同じように受け取っているものと、受け取り方の違うものがある。(図表 -3-3 参照)

【図表 -3-3】教師からの注意を児童・生徒はどう受け取っているか、その類型

		教師からの注意	児童・生徒の受け取り方	該当する項目
教師と児童・生徒と 同じ	1	男 > 女 小 > 中または中 > 小	同左 同左	忘れ物、言葉づかい、整理整頓、食べ方・座り方、頑張らないこと
	2	女 > 男	男 > 女	家の手伝い、泣いたとき
	3	中学では女 > 男	中学では男 > 女	清潔・身だしなみ、友だちと仲良く
教師と児童・生徒と 違う	3	中 > 小	小 > 中	帰宅時刻

双方とも同じように受け取っているものをパターン 1 とする。すなわち、教師側が男子に対して注意すると回答する割合が多く、子どもたち側も、男子の方が注意されると思っているように、性別の傾向が一致し、かつ、小学校の教師の方が中学校の教師より注意することが多く、児童・生徒も小学生の方が良く注意されると思っているなど、学校段階による教師と児童生徒の傾向が一致している項目である。これらに該当するものは「忘れ物」「言葉づかい」「整理整頓」「食べ方・座り方」「頑張らないこと」であった。

教師と児童・生徒の受け取り方の違うものには、3つのパターンがある。

そのうちの一つは、性別の傾向が相違する場合である。これをパターン2とする。教師は女子に対して注意すること傾向が強いが、児童・生徒は男子の方が注意されると受け止めているというように、性別の傾向が違うものである。それらに該当する項目は、「家の手伝い」「泣いたとき」である。

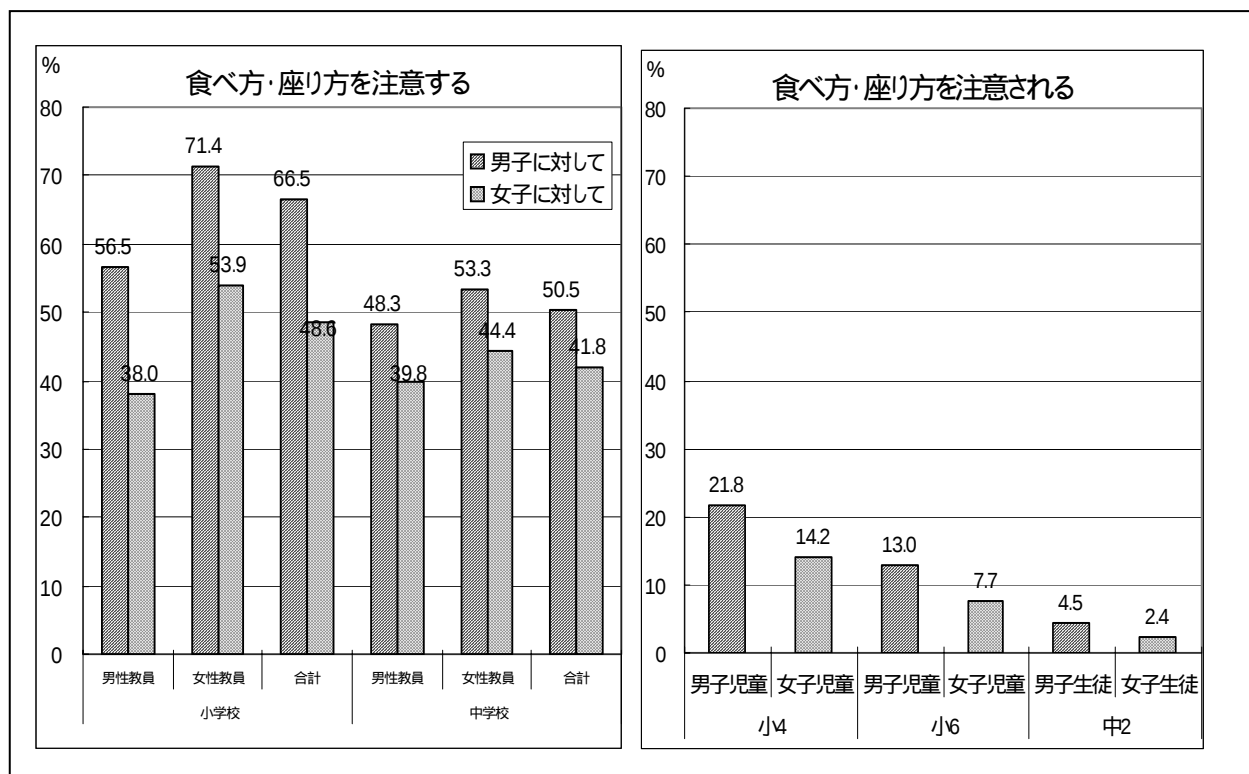
もう一つは、小学校では教師と児童・生徒の性別の傾向が同じであるが、中学校では逆になるものである。これをパターン3とする。「友だちと仲良く」「清潔・身だしなみ」がこれに該当する。

最後は学校段階による傾向が相違する場合である。これをパターン4とする。すなわち小学校の教師の方が中学校の教師より注意すると回答する割合が高くて、児童・生徒は中学生の方が注意されると思う割合が高いなど、学校段階に傾向が違うものである。これらに該当する項目は「帰宅時刻」があげられる。

次に、実際の結果を示す。

性別と学校段階による相違が、教師の場合と児童・生徒の場合と同様であるパターン1での例として「食べ方、座り方」について、図 -3-4 に示した。

【図表 -3-4】教師が注意すること、児童・生徒が注意されること（食べ方・座り方）



男子に対して小学校では 66.5%が、中学校では 50.5%の教師が「食べ方・座り方」を注意していると思っており、女子に対して小学校では 48.5%が、中学校では 41.8%の教師が

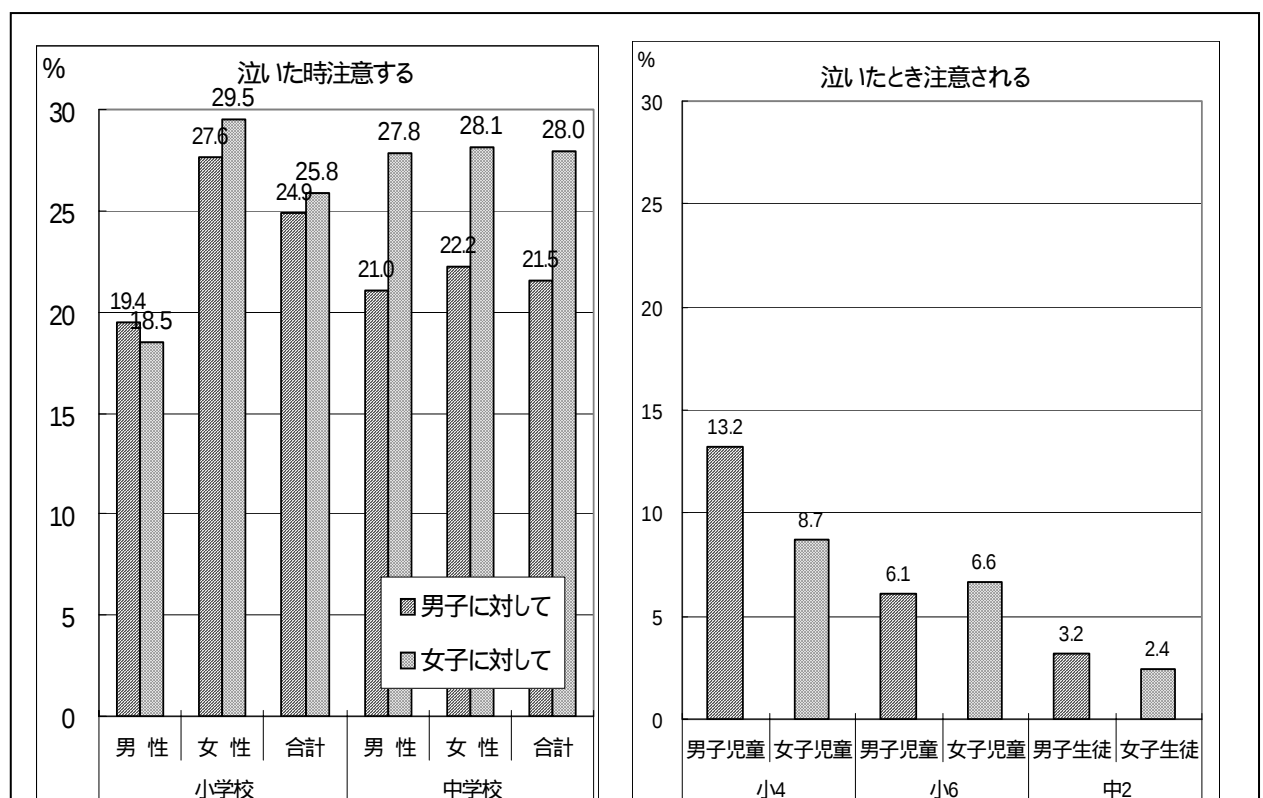
「食べ方・座り方」を注意していると思っている。すなわち、小学校でも中学校でも、男子の方を注意すると思っている教師が多く、また、小学校の教師の方が中学校教師より、注意すると思っている教師が多い。

児童・生徒も同様に、性別では、小4を例にとると、注意されると受け止めているのは、男子が21.8%、女子が14.1%と、男子の方が注意されると受け止めているものが多い。学校段階では、男子を例にとると、注意されると受け止めているのが小4で21.8%、中2で4.5%と、小学生の方が中学生より注意されると受け止めているものが多い。

ただし、注意する・注意されると思っている割合は、教師では4～7割だが、児童・生徒は2割程度かそれより下回る者しか注意されるとは受け取っていない。教師が注意していると考えているほどには児童・生徒は注意されると思っていないようである。

なお、これに該当する項目は「忘れ物」「言葉づかい」「整理整頓」「食べ方・座り方」「頑張らないこと」など、基本的な生活習慣に関するものが多く、男子の方が注意され、また、小学校の方が注意される傾向にあった。

【図表 -3-5】教師が注意すること、児童・生徒が注意されること（泣いた時）



次に、教師と児童・生徒の受け取り方が性別では相違するパターン2の例として、「泣いた時」(図表 -3-5)を示す。

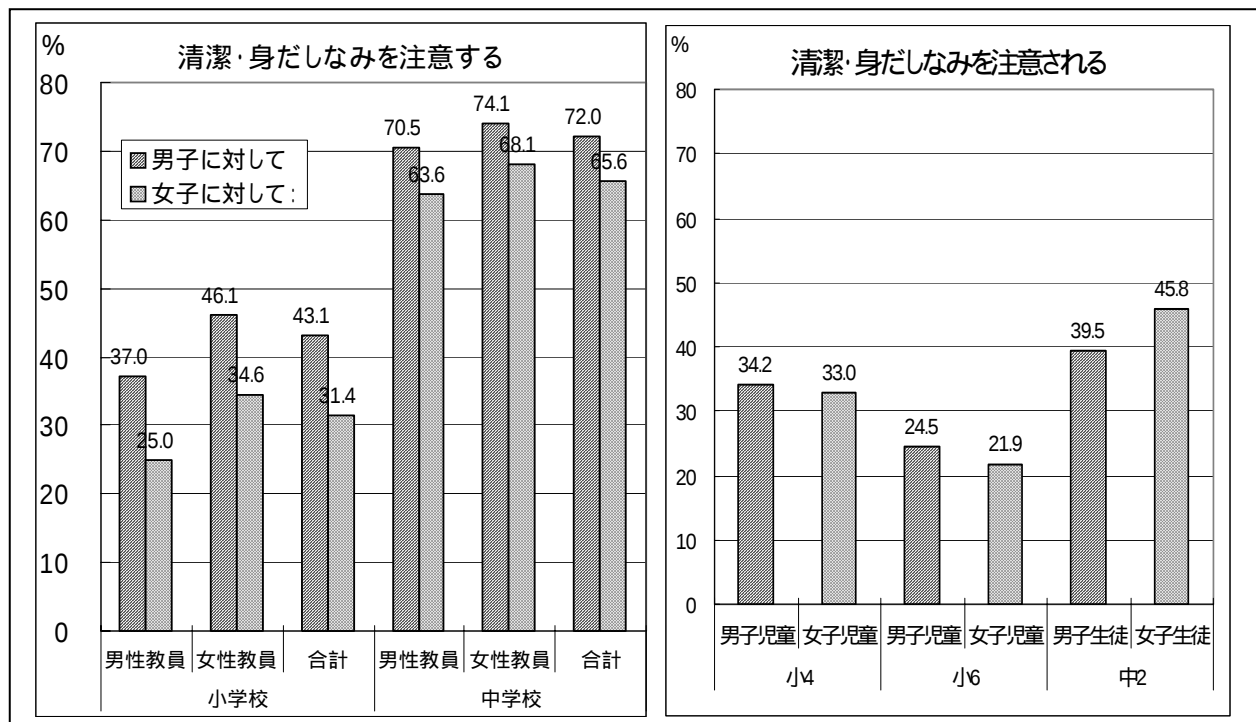
「泣いた時」は、教師の合計では、小学校では男子に対して24.9%が、女子に対して25.8%

が注意していると思い、中学校では男子に対して 21.5%が女子に対して 28.0%が注意していると思っており、小学校でも中学校でも、女子の方を注意している教師が多い。一方、児童・生徒の側では、中2を例にとると、男子では3.2%、女子では2.4%が「泣いた時」注意されると受け止めており、教師とは逆に、児童・生徒では男子の方が女子より教師から「泣いた時」注意されると受け止めている。

学校段階では、教師の場合、男子に対しては、小学校教師の方が中学校教師より注意すると考え、女子に対しては逆に中学校教師の方が小学校教師より注意すると考えている。児童・生徒では、男子を例にとると、小4では 15.0%が、中2では 7.7%が注意されるとし、小学生の方が中学生より注意されると受け止めており、学校段階の相違については教師と同様の傾向であった。

性別による教師側と児童・生徒側の受け取り方が逆であるのは、「泣いた時」の他、「家の手伝い」であり、どちらも、男子の方が注意されると捉えていた。この2項目は、「男は泣かない」「男子厨房に入らず」など、男らしさの象徴と関係して語られる項目である。男子が泣いたことを注意されると恥だという印象が強く残ったり、手伝いをするように注意されるとなぜ自分が注意されるのかと反発したりする可能性もあり、注意されたことが強く印象に残ることが、こうした結果に反映するとも考えられる。

【図表 -3-6】教師が注意すること、児童・生徒が注意されること（清潔・身だしなみ）

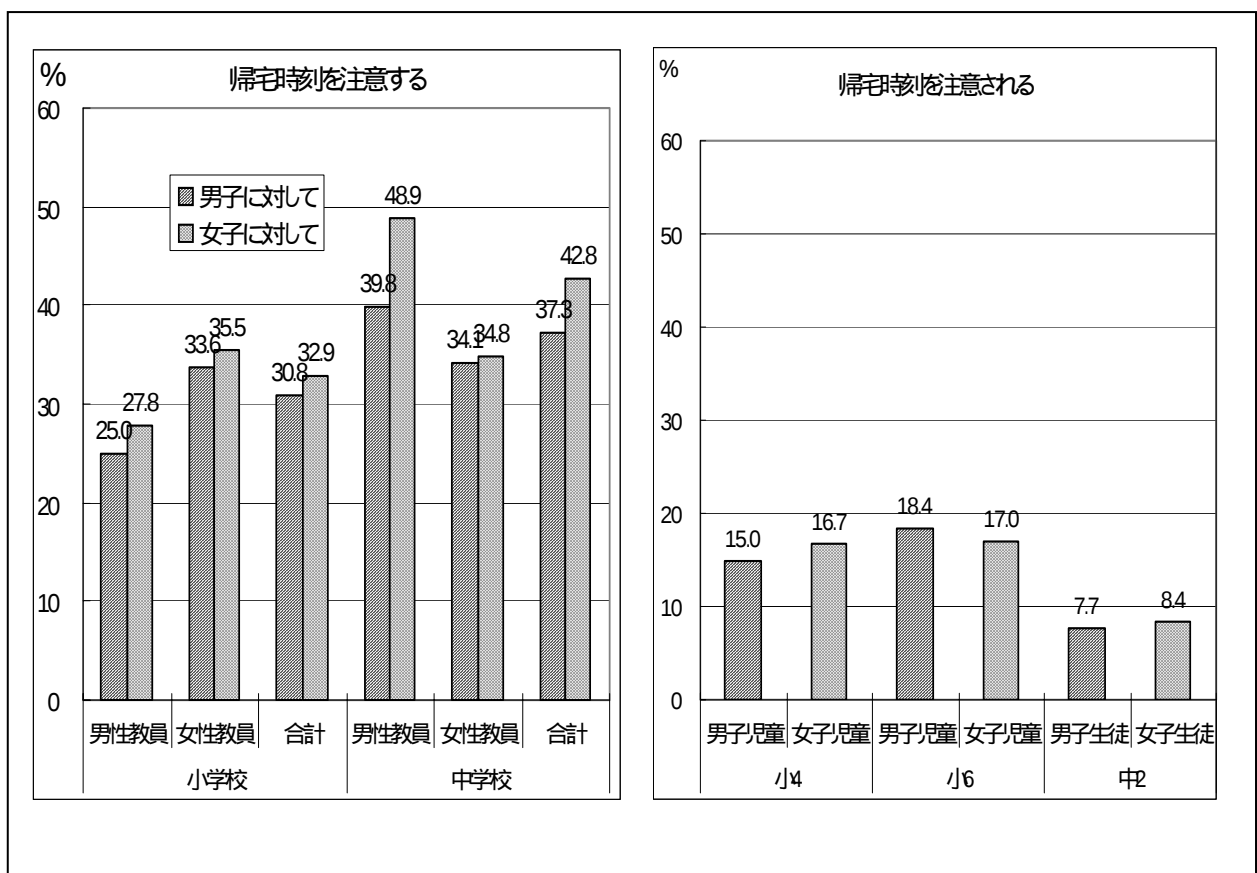


次にパターン3の事例として、「清潔・身だしなみ」の結果を図表 -3-6 には示した。

例えば合計でみると、小学校では男子に対して 43.1%、女子に対して 30.4%の教師が「清潔・身だしなみ」を注意するとし、中学校では男子に対して 72.0%、女子に対して 65.6%の教師が「清潔・身だしなみ」を注意するとし、男子に注意する傾向にある。児童・生徒では、例えば小6では男子の 24.5%、女子の 21.9.0%が注意されると捉えており、男子の方が注意されるという傾向は教師と同傾向である。しかし、中2では男子の 39.5%、女子の 45.8%が注意されるとし、教師が男子の方を注意していると考えていることとは逆に女子の方が注意されると受け止めている。注意する、注意されると思っている割合は教師も児童・生徒も中学校の方が多いことから、中学校では制服の指導が生活指導の重要な項目となっていると思われるが、おしゃれに関心が高い女子が教師の指導を特に反発しがちである結果とも思われる。

このパターンに該当する項目として、その他に「友だちと仲良く」があった。中学校教師は男子より女子を注意するとしているが、中2の生徒は女子より男子の方が注意されると思っていた。反抗期で人間関係が難しくなる時期に、特に男子の反発が大きいのかもしれない。

【図表 -3-7】教師が注意すること、児童・生徒が注意されること（帰宅時刻）



次に、教師と児童・生徒の受け取り方が学校段階で相違するパターン4の例として、「帰宅時刻」のデータを図表 3-7 に示した。「帰宅時刻」は、合計では、男子に対して小学校では 24.9%、中学校では 37.3%の教師が注意していると思い、女子に対して小学校では 25.8%、中学校では 42.8%の教師が注意しているとし、中学校の方が小学校より注意している教師が多い。なお、性別では、小学校でも中学校でも、女子の方を注意している教師が多い。児童・生徒で「帰宅時刻」を注意されると考えているのは、男子を例にとると、小4では 15.0%、中2では 7.7%で、中学生より小学生の方が教師から注意されると受け止めており、教師とは逆の受け止め方をしている。

中学生になると部活などで帰宅が遅くなりがちなので教師側は注意をしていると考えているが、児童・生徒の側は帰宅時刻が遅い割には注意を受けてないと受け取っているのかもしれない。

以上、教師と児童・生徒の受け止め方を性別と学校段階でみたところ、その傾向の相違を4つのパターンに分けられた。

- 1 , 一つは性別の傾向と学校段階の相違が、教師と児童・生徒で同様の項目である。これらには、「忘れ物」「整理整頓」「食べ方・座り方」など、しつけにあたる項目が多く該当していた。また、これらは、小学校で注意する、注意されることが多く、また、男子の方が注意する、されることが多かった。
- 2 , 二つには、教師は女子に注意していることが多いと感じているが児童・生徒は男子の方が注意されていると受け取っているなど、性別の傾向が教師と児童・生徒で相違する項目である。これらには、「家の手伝い」「泣いたとき」といった、男らしさと関わって語られる項目が該当した。
- 3 , 三つには、性別の傾向が小学校では教師と児童・生徒と同様であったが、中学校では逆になっていた項目である。「清潔・身だしなみ」について教師は男子に注意している者が多いのに対して、児童・生徒は女子が注意されると受け取っていた。また、「友だちと仲良く」について教師は女子に対して注意している者が多いが、児童・生徒は男子の方が注意されると受け取っている者が多かった。おしゃれに関心が高くなる女子は身だしなみに対する教師からの注意に反発をし、反抗期に人間関係が難しい年頃の男子は人間関係に関する教師からの注意に反発する結果とも受け取れる。
- 4 , 四つ目は学校段階で相違するものである。「帰宅時刻」について、教師は小学校の方が中学校より注意する者が多かったが、児童・生徒は小学生より中学生の方が注意されると受け取る者が多かった。高学年になるにつれて帰宅時刻が遅いことを容認する教師と児童・生徒との受け取り方の相違と思われた。

3.4. 教師の指導の受け取り方の相違

ここでは、教師の調査の問8と児童・生徒の調査の問6の(2)(3)(4)(5)を用いた。

教師に対しては「問8 あなたは、子どもたちにどのように接していますか。次のことについて、当てはまるものに○をつけて下さい。」として、「1.女子の方、2.どちらかというと女子、3.男女同じくらい、4.どちらかというと男子、5.男子の方」の5つの選択肢から回答したうち、「1.女子の方」「2.どちらかというと女子」と回答した割合を教師が女子に対して行う指導ととらえ、「4.どちらかというと男子」「5.男子の方」と回答した割合を教師が男子に対して行う指導ととらえた。

児童・生徒のデータは「問6 授業中のあなたのような様子について、あてはまるものすべてに○をつけてください」として7つ並んだ選択肢に○をつけてもらったもののうち、女子が○をつけた割合、また男子が○をつけた割合を、教師の女子に対して、男子に対して行う指導との比較に用いた。なお、7つの選択肢のうち、比較に用いたのは、教師の設問と対応できる4つである。

いずれの項目も、教師は男子の方をより指導すると考えている。しかし、子どもたちは教師と同様に捉えているものもあるが、必ずしも男子の方が指導されると受け取っていない。そこで、教師と同様に捉えている項目をパターンAとし、教師と同様でない項目をパターンBとした。パターンAに該当する項目は「厳しくしかる」、パターンBに該当する項目は「指名する」「仕事を頼む」「話しかける」であった。

【図表 -3-8】生徒指導や教科指導での教師と子どものとらえ方の違い、その類型

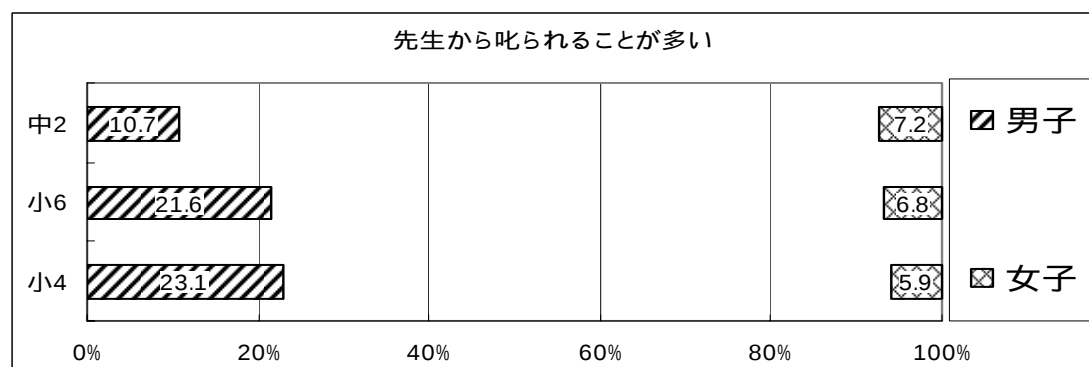
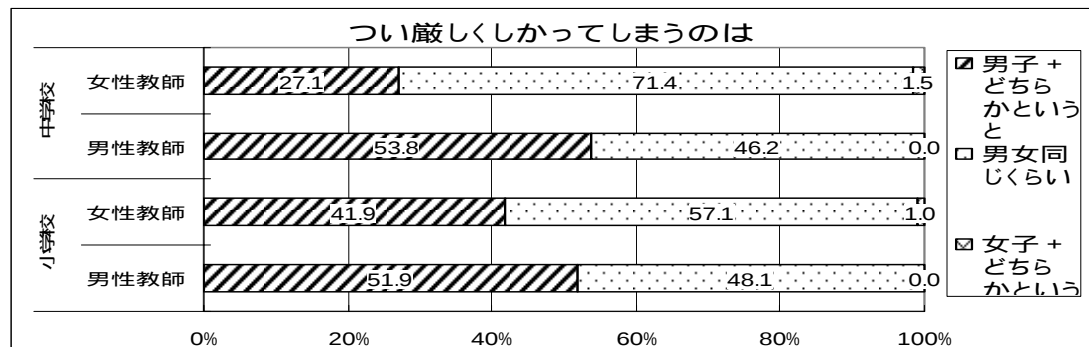
	教師の指導	児童・生徒の受け取り方	
A	男子 > 女子 小学生 > 中学生	同左 同左	つい厳しく叱る
B	男子 > 女子 小学生 > 中学生	男子 女子 中学生 小学生	指名する 仕事を頼む 話しかける

パターンAの「つい厳しく叱る」について、図表 -3-9 に示した。

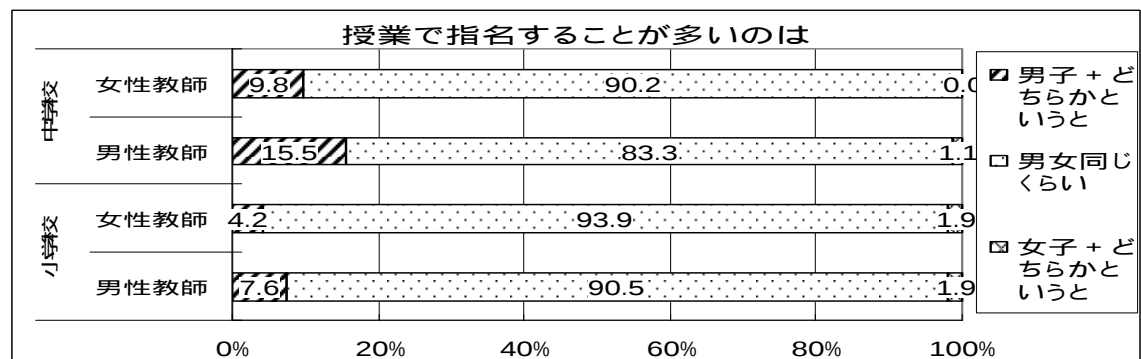
教師では、「つい厳しく叱る」と回答した割合は、中学校の女性教師では男子に対して27.1%、女子に対して1.5%、男性教師では男子に対して53.8%、女子に対して0.0%と、女子に対してはほとんど厳しくしからずに、男子を厳しく叱っている教師が多い結果であった。小学校の教師も同様である。特に男性教師はその傾向が強い。それに対して、「叱られることが多い」とする児童・生徒は、中2では、男子で10.7%、女子で7.2%と、男子の方が多く、教師と同様の傾向であった。すなわち、教師も児童・生徒も男子の方が厳し

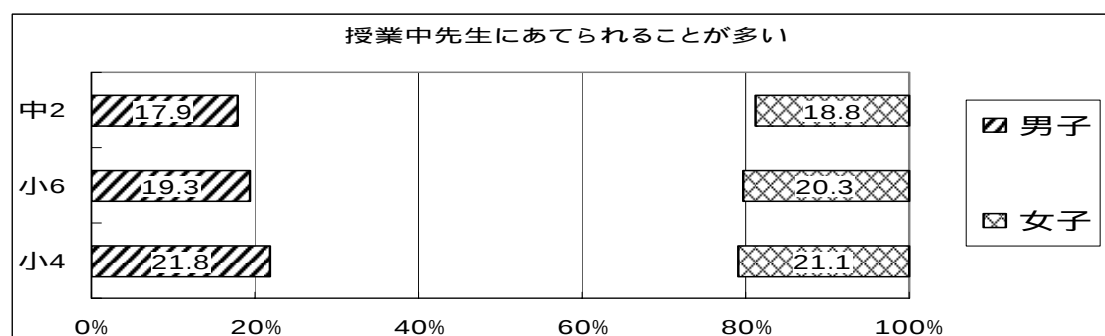
くしかる、叱られると思っていた。

【図表 -3-9】生徒指導や教科指導での教師と子どものとらえ方の違い（厳しくしかる）



【図表 -3-10】生徒指導や教科指導での教師と子どものとらえ方の違い（授業で指名する）





次に、パターンBの例として、「指名する」の結果を図表 -3-10 に示した。

「指名する」と回答した教師の割合は、中学校の女性教師では男子に対して9.8%、女子に対して0.0%、男性教員では男子に対して15.5%、女子に対して1.1%と、女子はほとんど指名されずに男子を指名している教師が多い結果であった。小学校の教師も同様である。特に男性教員はその傾向が強い。一方、「先生にあてられることが多い」とする児童・生徒の割合は、中2で男子が17.9%、女子が18.8%と女子が多くなっている、小学校も同様である。すなわち、教師の多くは男子を指名することが多いと思っているが、児童・生徒は、女子の方があてられると思っている者が多く、教師と児童・生徒との認識が異なっていた。教師と児童・生徒の受け取り方が相違するのは、この他、「仕事を頼む」「話しかける」であった。

すなわち、教師は、男子への指導を意識しているものが一定程度いるが、児童・生徒は必ずしもそのように受け取らずに、男女同等に教師から指導を受けていると思っていた。

3.5. 男女の特性の相違のとらえ方の違い

ここでは、教師調査の問9の(1)(2)(4)(5)と、子どもの調査の問5の(2)(3)(6)(1)を用いている。

教師の調査では「問9 あなたが授業をしているクラスの子どもたちについて、当てはまるものに○をつけて下さい。」として、「1.女子の方、2.どちらかというと女子、3.男女同じくらい、4.どちらかというと男子、5.男子の方」の5つの選択肢から回答してもらっている。このうち、「1.女子の方」「2.どちらかというと女子」と回答した割合を女子の特性と捉えているものの割合として、「4.どちらかというと男子」「5.男子の方」と回答した割合を男子の特性と捉えているものの割合として用いた。

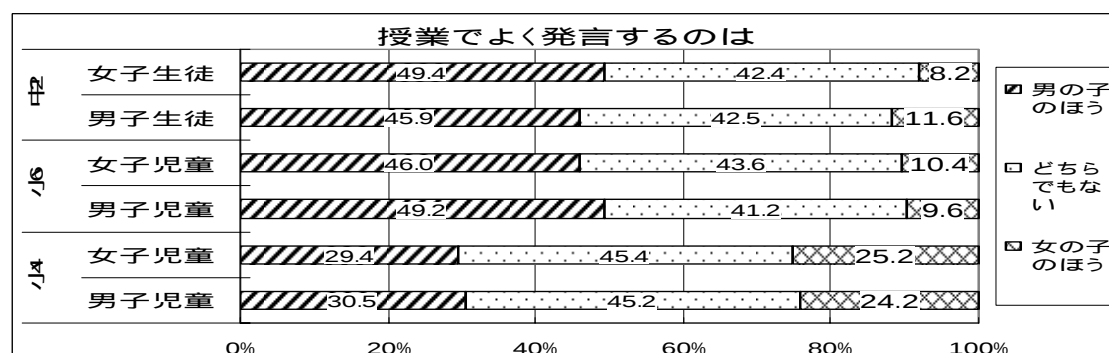
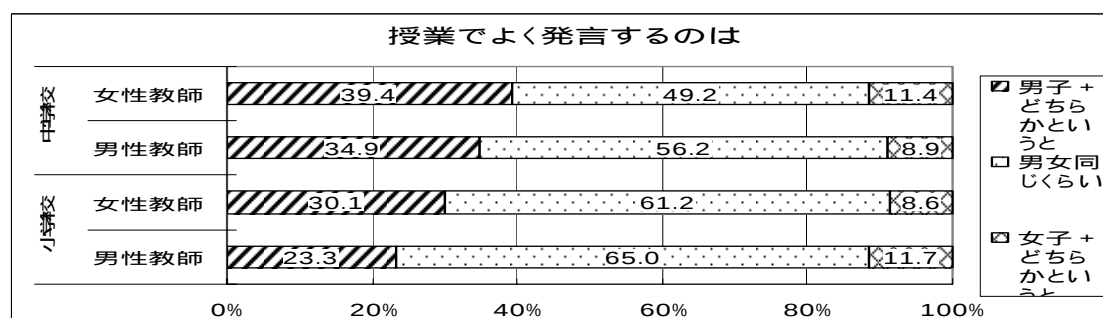
児童・生徒の調査では、「問5 あなたのクラスで次のことはどんなようすか。下のそれぞれについて、当てはまる番号に○をつけてください」という設問で、「1.女の子の方、2.どちらでもない、3.男の子の方」で回答してもらっているもののうち、「1.女の子の方」と回答した割合を女子の特性と捉えている者の割合、「3.男の子の方」と回答した割合を男子の特性と捉えている者の割合として用いた。

【図表 -3-11】男女の特性の相違のとらえ方の違いの類型

	教師の受け取り方	児童・生徒の受け取り方	
イ	男子 > 女子	男子 > 女子	よく発言する リーダーになる
ロ	男子 女子	男子 > 女子	偉そうにしている
ハ	男子 < 女子	自分たち	意見が良くとおる

教師も児童・生徒の両方ともに男子の特性と思っているもの（イ）教師は男女同じような特性とされていて子どもたちは男子の特性と思っているもの（ロ）教師は女子の特性とされているが、児童・生徒の男子では男子の方、女子では女子の方と思っているもの（ハ）の3つの類型に分かれる。

【図表 -3-12】男女の特性のとらえ方の違い（よく発言する）



教師も子どもも男子の特性と思っているもの（イ）は、「よく発言する」「リーダーになる」の2項目であった。「よく発言する」を図表 -3-12 に示す。

教師では「よく発言する」のは、中学校の女性教師で男子であると回答している者が39.4%、女子であると回答している者が11.4%、男性教師ではそれぞれ34.0%、8.9%と、男子であるとする教師が多かった。小学校教師でも同様である。また、児童・生徒も、中2の女子で男子であると回答しているものが45.9%、女子であると回答したものが8.2%、

男子ではそれぞれ 49.4%、11.6%と、男子であるとしているものが女子と回答したものより大きく上回っている。小6、小4でも同様であった。

教師は男女同じような特性とされていて子どもたちは男子の特性とされているもの（ロ）は「偉そうにしている」であった（図表 -3-13）。

「偉そうにしている」は、中学校の女性教師で男子であると回答している者が 17.7%、女子であると回答している者が 23.8%、男性教師ではそれぞれ 19.2%、18.0%と、小学校の女性教師で男子であると回答している者が 16.8%、女子であると回答している者が 18.0%、男性教師ではそれぞれ 19.2%、22.2%と、男子である、女子であるとする割合に大きな違いはなかった。しかし、児童・生徒は、中2の女子では男子であると回答しているものが 11.8%、女子であると回答したものが 25.3%と、男子ではそれぞれ 12.4%、25.3%と、女子であるとする者が多かった。小6、小4でも同様であった。すなわち、教師は男女同じようであると捉えているが、児童・生徒は男子の特性と捉えていた。

【図表 -3-13】男女の特性のとらえ方の違い（偉そうにしている）

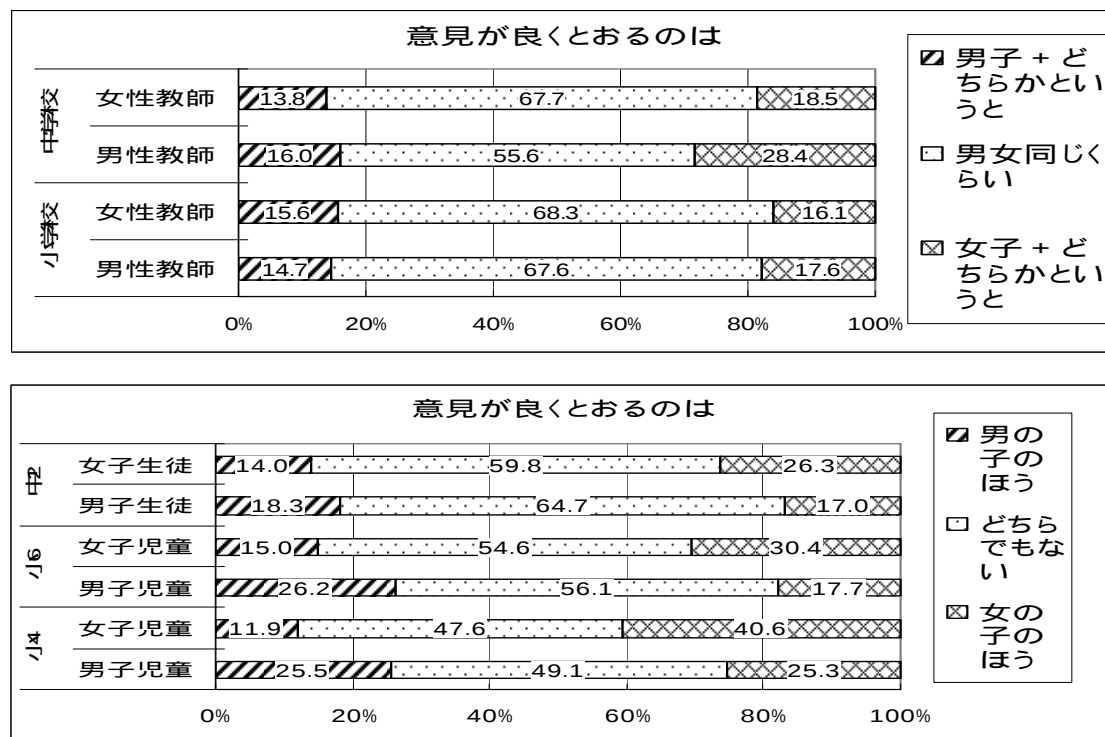


教師は女子の特性とされているが、児童・生徒では男子は男子の方、女子は女子の方とされているもの（ハ）は「意見がよく通る」である（図表 -3-14）。「意見がよく通る」のは中学校の女性教師で男子であると回答している者が 13.8%、女子であると回答している者が 18.5%、男性教師ではそれぞれ 16.0%、24.8%と、女子であるとする教師が多かった。小学校教師でも同様である。しかし、児童・生徒は、中2の女子で男子であると回答して

いるものが14.0%、女子であると回答したものが26.3%と、女子であるとする者が多かったが、男子ではそれぞれ18.3%、17.0%と男子であると回答している者の割合が高い。小6、小4も同様であった。すなわち、女子は意見が良く通るのは自分たちであり、男子は意見が良く通るのは自分たちであると考えている者が多かった。「よく発言する」のは男子の方であると考えているが、「意見が良く通る」のは自分たちであると考えているところが、男女の特性の微妙な違いを示していると思われる。

以上、男女の特性は、教師は男子の特性と考えているもの、女子の特性と考えているものがあるが、児童・生徒は男子の特性と考えるものが多く、女子の特性と考えるものはなかった。

【図表 -3-14】男女の特性のとらえ方の違い（意見が良く通る）



3.6. 男女の性格のとらえ方の相違

ここでは、教師の調査の問9の(8)(9)(10)(11)と、子どもの調査の問11の(4)(7)(8)(9)を用いた。教師の調査の問9は男女の特性とした上記で述べたとおりである。このデータの「1.女子の方」「2.どちらかという女子」と回答した割合を女子の性格として、「2.どちらかという男子」「5.男子の方」と回答した割合を男子の性格と捉えているものの割合として用いたことも、同様である。

児童・生徒では「問11 あなたには、次のことがらがどのくらいあてはまりますか。下のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください」という設問で、「1.はい、

2. どちらともいえない、3. いいえ」で回答してもらったもののうち、女子が「1. はい」と回答した割合を女子の性格と捉え、男子が「1. はい」と回答した割合を男子の性格と捉えているとした。

【図表 -3-15】男女の性格の相違のとらえ方の違い、その類型

	教師の受け取り方	児童・生徒の受け取り方	
イ	男子 > 女子	男子 女子	勝ち負けにこだわる 素直に聞く
ロ	男子 < 女子	男子 女子	グループで行動する
ハ	男子 女子	男子 > 女子	反抗的

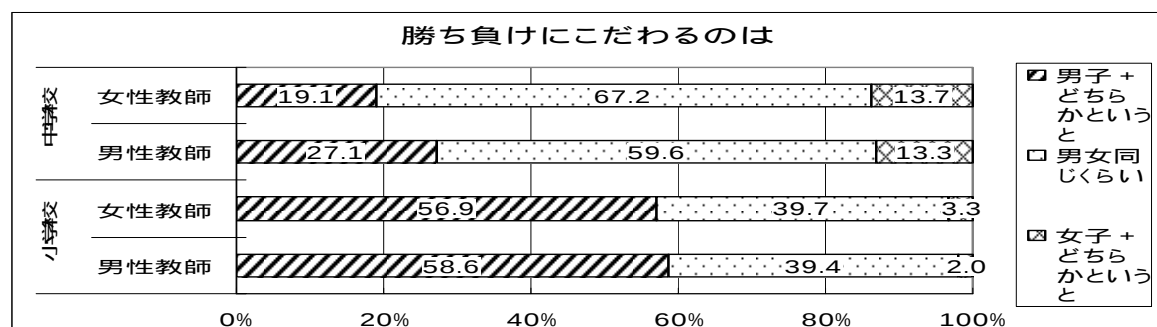
ここでは教師のとらえ方によって、男子の性格（イ）、女子の性格（ロ）、男女同程度の性格（ハ）をとらえる3つのパターンに分けることができた。

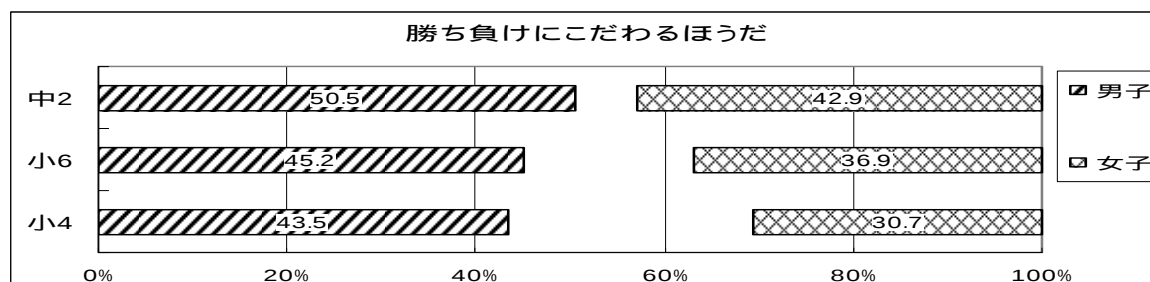
パターン（イ）に該当するのは「勝ち負けにこだわる」「素直に聞く」の項目である。

「勝ち負けにこだわる」の結果を図表 -3-15 に示した。例えば、教師は勝ち負けにこだわるのは、中学校の女性教師で男子であると回答している者が 19.1%、女子であると回答している者が 13.7%、男性教師ではそれぞれ 27.1%、13.3%と、小学校の女性教師で男子であると回答している者が 56.9%、女子であると回答している者が 3.3%、男性教師ではそれぞれ 56.6%、2.0%と、とりわけ小学校で男子であるとする教師が多かった。

しかし、児童・生徒は、中2で自分が「勝ち負けにこだわる方だ」と回答したのは男子が 50.5%、女子が 42.9%と大きな違いがない。小6では自分が「勝ち負けにこだわる方だ」と回答したのは男子が 45.2%、女子が 36.9%、小4では、それぞれ 43.5%、30.7%と、多少男子の方が多かったが、大きな差はない。すなわち、教師は勝ち負けにこだわるのは男子の特徴ある性格と考えているが、児童・生徒が「勝ち負けにこだわる方だ」と回答したのは、男女別大きな違いはなかった。

【図表 -3-16】男女の特性の相違のとらえ方の違い（勝ち負けにこだわる）



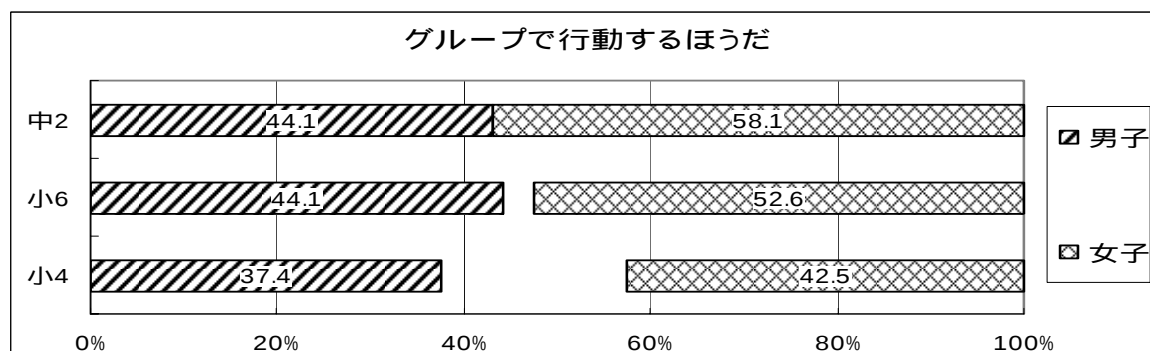
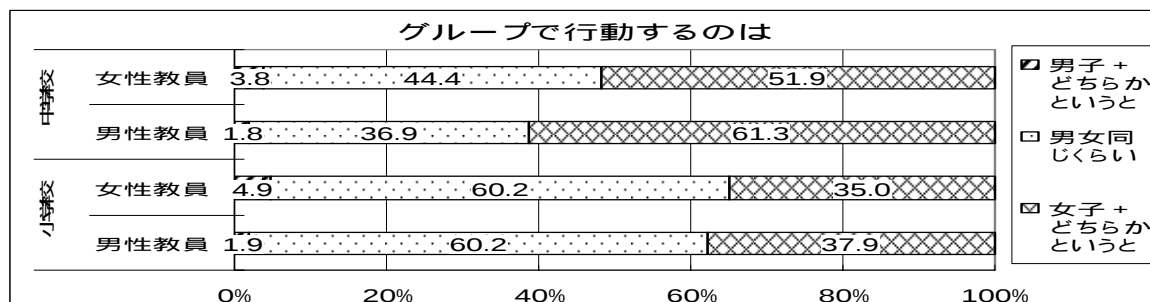


パターン（口）に該当するのは「グループで行動する」というものである。

中学校の女性教師で「グループで行動するのは」男子であると回答している者が 3.8%、女子であると回答している者が 51.9%、男性教師ではそれぞれ 1.8%、61.3%と、小学校の女性教師で男子であると回答している者が 4.9%、女子であると回答している者が 35.0%、男性教師ではそれぞれ 1.9%、37.9%と、男子であるとする教師が多かった。

しかし、児童・生徒は、中2で自分が「グループで行動する」と回答したのは男子が 44.1%、女子が 58.1%、小6では男子が 33.1%、女子が 52.6%、小4では、それぞれ 37.4%、42.5%と、多少女子の方が多かったが、教師ほどには大きな差はなかった。すなわち、教師はグループで行動するのは女子の性格の特徴と考えているが、児童・生徒は教師ほどにはどちらかの生に偏った特徴とは考えていないようである。

【図表 -3-17】男女の特性の相違のとらえ方の違い（グループで行動する）

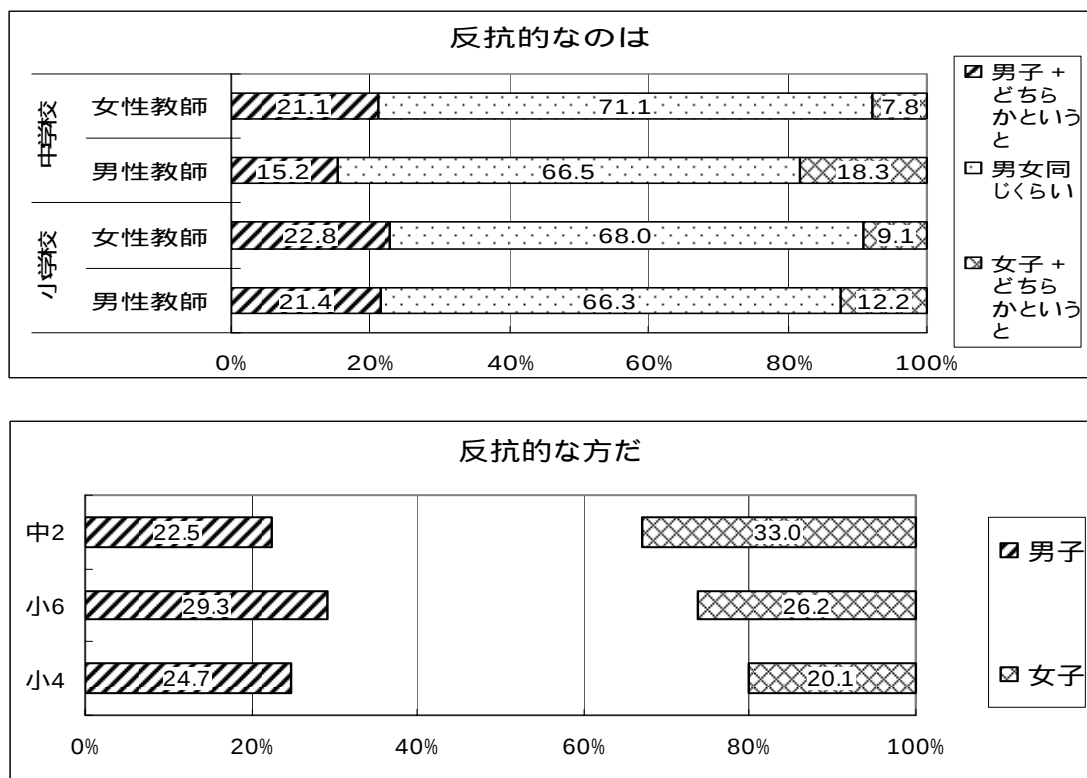


パターン（八）に該当するのは「反抗的」という項目である。

中学校の女性教師で「反抗的」であるのは男子であると回答している者が 21.1%、女子であると回答している者が 7.8%、男性教師ではそれぞれ 15.2%、18.3%と、小学校の女性教師で男子であると回答している者が 22.8%、女子であると回答している者が 9.1%、男性教師ではそれぞれ 21.4%、12.2%と、男子であるとする教師が多少多いものの、（イ）（ロ）ほどの相違はなく、どちらかというと同じ程度に捉えているとすることができる。一方、児童・生徒は、中2で自分が「反抗的」と回答したのは男子が 22.5%、女子が 33.0%、小6では男子が 29.3%、女子が 26.2%、小4では、それぞれ 24.7%、20.1%と、大きな差はないが、多少男子の方が多かった。

以上、男女の性格は、教師は女子の性格の特徴、男子の性格の特徴とするものがあるが、児童・生徒が自分自身をどのような性格かと回答した結果では、男子の性格の特徴、女子の性格の特徴、と明らかな相違があるものはなかった。すなわち、どちらかという男子の特徴、女子の特徴という捉え方は、他を区分けしてみる時に相違が表れるが、自分自身の性格を判断した結果を男女別に分類した場合には男女に偏りができにくい。すなわち、らしさの判断の場合男女差が表れやすいが、実態を分類した場合には男女差が表れにくいとすることができそうである。

【図表 -3-18】男女の特性の相違のとらえ方の違い（反抗的なのは）



3.7. まとめ

以上をまとめると、次のようなことが言える。

1. 教師が児童生徒は何でも話してくれると思っているほどに、児童・生徒は教師に何でも話せるとは思っていなかった。このように、教師と児童・生徒の受け取り方は一致していないものが多数あった。例えば、帰宅時刻を教師は中学生に注意していると思っているが、中学生は教師ほどに注意されたと思っていなかった。
2. 性別あるいは学校段階による、教師から注意する、児童・生徒が注意されることの相違は、「忘れ物」「整理整頓」「食べ方・座り方」などしつけにあたる項目は小学生に多く、また、男子に多く行っている傾向にあった。「家の手伝い」「泣いたとき」といった、男らしさと関わって語られる項目は、教師は女子に注意していることが多いと感じているが児童・生徒は男子の方が注意されていると受け取っているなど、性別の傾向が教師と児童・生徒で相違していた。
3. 教師は、男子への指導を意識して行っている者が一定程度いるが、児童・生徒は必ずしもそのように受け取らずに、男女同等に教師から指導を受けていると思っていた。
4. 男女の特性は、教師は男子の特性と考えているもの、女子の特性と考えているものがあるが、児童・生徒は男子の特性と考えるものが多く、女子の特性と考えるものはなかった。
5. 男女の性格は、教師は女子の性格の特徴、男子の性格の特徴とするものがあるが、児童・生徒が自分自身をどのような性格かと回答した結果では、男子の性格の特徴、女子の性格の特徴、と明らかな相違があるものはなかった。すなわち、どちらかという男子の特徴、女子の特徴という捉え方は、他を区別してみる時に相違が表れるが、自分自身の性格を判断した結果を男女別に分類した場合には男女に偏りができにくい。すなわち、らしさの判断の場合男女差が表れやすいが、実態を分類した場合には男女差が表れにくかった。

以上、教師側と子どもの側との受け取り方を比べた結果、両方の受け取り方には多くの違いがあり、教師のジェンダーの見方が児童生徒の見方にストレートに反映するものではなかった。教師は男女同様に受け取っていても児童・生徒は性別の相違を意識しているものがある一方、また、教師が男女を区別して受け取っているものでも児童・生徒は必ずしもそうでないことも明らかになった。この点を改めて見直し、ジェンダーバイアス解消の一方策として学校の生活や指導において、教師自身がジェンダーバイアスにとらわれずに子どもたちと関係を持つことも必要であろう。

4．学校組織文化と教育活動に関する分析 - 児童生徒との関係を中心に

木村育恵

本稿では、職場としての学校の組織文化や受け持ちのクラスの状況に焦点を当てて、教員の教育活動や子どもたちに対する見方・捉え方との関連について、ジェンダーの視点から検討していくことにする。

4.1. 学校の組織文化

職場としての学校における組織文化については、例えば久富（1994，13 頁）が「教師たちがおかれている社会的・制度的な位置と、日常的な教育活動・教育実践を媒介として」その間に働くものとし、教師を取り巻く状況の諸側面に見られる独特の行動の型や規則体系の総体としてそれを「教師文化」と捉えている。「教師文化」に着目した先行研究には、職場集団としての教師集団が持つ「協働」や「同僚性」に関するものなどがある²。

これら「教師文化」に着目する意義は、「教師の意識や行動を暗黙のうちに規定している有形無形の束縛を具体的に解明し、それらの束縛から脱する方途を探索すること」（佐藤 1994，23 頁）にある。本研究においても、こうした視点から職場としての学校の組織文化に着目し、日頃の教育実践の関連をジェンダーの視点から検討していくことにする。

4.1.1. 教師を取り巻く職場の組織文化

学校における職場の組織文化に関連する問 2（1）から（9）の項目について、「とてもそう思う」に 1、「少しそう思う」に 2、「あまりそう思わない」に 3、「全くそう思わない」に 4 を与えて因子分析を行った。その際、「問 2（1）職員会議などで活発な議論が交わされている」と「問 2（2）教員間の意思疎通がうまくとれている」は、他の項目と逆の傾向を示しているので、「とてもそう思う」に 4、以下、3～1 の得点を与えた。その結果、【図表 -4-1】にあるように、2 つの因子が検出された（KMO=0.780）。

²例えば、次のようなものがある。

- ・永井聖二 1985，「教師専門職論再考—学校組織と教師文化の特性との関連から—」『教育社会学研究』第 43 集，45-55 頁。
- ・酒井朗 1998，「多忙問題をめぐる教師文化の今日的様相」志水宏吉編著『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院，223-248 頁。
- ・油布佐和子 1988，「教員集団の実証的研究」久富善之編著『教員文化の社会学的研究』多賀出版，147-208 頁。

【図表 -4-1】教師を取り巻く職場組織文化に関する因子行列

	第1因子	第2因子
問2(6)新しいことを始めにくい雰囲気がある	0.731	0.083
問2(3)周囲と違う意見を言いにくい雰囲気がある	0.613	0.135
問2(2)教員間の意思疎通がうまくとれている(逆)	0.600	0.173
問2(5)自発的に行動するよりも指示を待って行動する雰囲気がある	0.597	0.112
問2(1)職員会議などで活発な議論が交わされている(逆)	0.580	0.101
問2(4)管理職からの強い指導がある	0.412	0.154
問2(9)男性教員の方が女性教員より管理職からの信頼されている	0.164	0.827
問2(8)男性教員の方が女性教員より保護者からの評判がよい	0.080	0.772
問2(7)職場では男性の意見がとおりやすい	0.223	0.569

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法。3 回の反復で回転が収束。

そこで、検出された第1因子を「保守的・消極的な職場文化因子」(アルファ係数 = 0.7699)とし、第2因子を「男性優位な職場文化因子」(アルファ係数 = 0.7790)として、その得点分布から「高」「中」「低」の3段階に分け、学校種別【図表 -4-2】、男女別【図表 -4-3】にクロス集計をした。

その結果、学校種、男女別ともに保守的・消極的な組織文化の傾向が高いと男性優位な組織文化の傾向に対する認識も高いことが分かった。

【図表 -4-2】学校種別 保守的・消極的な組織文化と男性優位な組織文化との傾向

校種別			保守的・消極的な組織文化の傾向			χ ²
			高	中	低	
小学校	男性優位な組織文化	高 (N=62)	54.8%	35.5%	9.7%	***
		中 (N=151)	34.4%	40.4%	25.2%	
		低 (N=108)	18.5%	39.8%	41.7%	
	計 (N=321)		33.0%	39.3%	27.7%	100.0%
中学校	男性優位な組織文化	高 (N=51)	43.1%	51.0%	5.9%	***
		中 (N=161)	23.6%	48.4%	28.0%	
		低 (N=96)	21.9%	27.1%	51.0%	
	計 (N=308)		26.3%	42.2%	31.5%	100.0%

【図表 -4-3】男女別 保守的・消極的な組織文化と男性優位な組織文化との傾向

性別			保守的・消極的な組織文化の傾向			χ ²
			高	中	低	
男 性	男性優位な組織文化	高 (N=39)	43.6%	46.2%	10.3%	***
		中 (N=139)	27.3%	46.8%	25.9%	
		低 (N=92)	22.8%	28.3%	48.9%	
	計 (N=270)		28.1%	40.4%	31.5%	100.0%
女 性	男性優位な組織文化	高 (N=69)	53.6%	39.1%	7.2%	***
		中 (N=162)	30.9%	41.4%	27.8%	
		低 (N=103)	19.4%	35.0%	45.6%	
	計 (N=334)		32.0%	38.9%	29.0%	100.0%

4.1.2. 学校の組織文化と教育活動

では、「保守的・消極的な組織文化」と「男性優位な組織文化」が日頃の教育活動とどう関連しているのだろうか。本節では、子どもたちに対する見方・捉え方に関する質問項目に特に着目して分析していくことにする。

4.1.2.1. 保守的・消極的な組織文化と教育活動との関連

はじめに、「保守的・消極的な組織文化」に着目して、日頃の教育活動で子どもたちにどのように接しているのかをたずねた問8の質問項目との関連を検討してみよう。以下に挙げるのは、具体的な質問項目である。

- (1) 授業で指名することが多いのは
- (2) つい、厳しく叱ってしまうのは
- (3) つい、優しくしてしまうのは
- (4) 休み時間などに話しかけることが多いのは
- (5) 励ますことが多いのは
- (6) 考えていることや気持ちが分かりやすいのは
- (7) 仕事を頼みやすいのは

この質問項目に対する回答は「1 = 女子の方」「2 = どちらかという女子の方」「3 = 男女同じくらい」「4 = どちらかという男子」「5 = 男子の方」であったが、ここでは1と2をまとめて「女子の方」、4と5をまとめて「男子の方」とし、「女子の方」「男女同じくらい」「男子の方」の3件法に集計し直して分析に用いることにする。

「保守的・消極的な組織文化」と問8の各項目について 教員の男女別、校種別に三重クロス集計をしたところ、全体的に「男女同じくらい」と回答する割合が高かった。統計的な有意差が見られたのは 校種別のうち「(6) 考えていることや気持ちが分かりやすいのは」【図表 -4-4】であった。

【図表 -4-4】校種別 保守的・消極的な組織文化と子どもたちへの接し方との関連

				問8(6)考えていることや気持ちの分かりやすいのは(%)			χ ²
				女子の方	男女同じくらい	男子の方	
小学校	保守的・消極的な組織文化	高	N=107	11.2	53.3	35.5	n.s.
		中	N=126	11.9	55.6	32.5	
		低	N=89	9.0	56.2	34.8	
	合計 N=322			10.9	55.0	34.2	
中学校	保守的・消極的な組織文化	高	N=83	12.0	49.4	38.6	*
		中	N=130	10.8	40.8	48.5	
		低	N=96	22.9	33.3	43.8	
	合計 N=309			14.9	40.8	44.3	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

この項目では、小学校では保守的・消極的な組織文化の程度にかかわらず回答の傾向に差がなかったが、中学校では保守的・消極的な程度が低くなると「男女同じくらい」と考える割合が減少し、「女子の方」と答える割合がやや増える傾向が見られた。これまでの先行研究では、学年が上がるに従って活発に発言する「男子の教室支配」と、女子を放置することによってものを言わなくなる「女子の静寂化」が進行する（木村1999）ことが指摘されており、「男子の方」が分かりやすいと考えるケースが中学校で増えている今回の結果はその一端を示しているように思われる。ただし、保守的・消極的な組織文化の程度が低い場合では、女子の方が考えや気持ちが分かりやすいと回答するケースが若干増えていたことから、学校の組織文化が脱保守的・消極的傾向に向かえば、静寂化した女子により目を向けた教育活動が展開できるのではないかということが示唆される。

4.1.2.2. 男性優位な組織文化と教育活動との関連

次に、「男性優位な組織文化」と問8の関連を見ていく。全体的に「男女同じくらい」と回答する割合が多数を占めていたが、その中でも「(3) つい優しくしてしまうのは」と「(7) 仕事を頼みやすいのは」の2項目で有意差が見られた。前者の項目では 男女別校種別ともに有意差が見られ、後者の項目では 校種別でのみ有意差が見られた。以下

で個別の結果を見ていこう。

【図表 -4-5】男女別 男性優位な組織文化と子どもたちへの接し方との関連

				問8(3)つい優しくしてしまうのは(%)			χ ²
				女子の方	男女同じくらい	男子の方	
男性	男性優位な組織文化	高	N=38	7.9	57.9	34.2	*
		中	N=137	16.1	73.0	10.9	
		低	N=90	17.8	66.7	15.6	
	合計		N=255	10.9	55.0	34.2	
女性	男性優位な組織文化	高	N=69	21.7	71.0	7.2	*
		中	N=159	10.1	79.2	10.7	
		低	N=104	8.7	87.5	3.8	
	合計		N=332	12.0	80.1	7.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

男性優位な組織文化に対する認識と「(3)つい優しくしてしまうのは」について男女別を統制変数にして三重クロス集計で分析すると、【図表 -4-5】にあるように、男性では職場が男性優位であると認識する程度が高いと同性の「男子の方」につい優しくしてしまう傾向が高く、逆に男性優位な組織文化に対する認識が低い場合は男子と同程度女子にも優しくしてしまうと答える傾向が見られた。一方、女性教員の回答を見ると、職場が男性優位であると認識する程度が高い場合は同性の「女子の方」につい優しくしてしまう傾向が高く、男性優位な組織文化に対する認識が低い場合は「女子の方」も「男子の方」も回答が減少し「男女同じくらい」と答える割合が増えていた。

では、校種別の三重クロス集計では、どのような傾向が見られたのか、以下の【図表 -4-6】をもとに検討していく。

男性優位な組織文化に対する認識と「つい優しくしてしまうのは」について見ていくと、全体的に「男女同じくらい」とする割合が最も高かった。男女どちらかについて回答したのを見ると、小学校では男性優位の組織文化に対する認識の程度によって回答に差が見られず「女子の方」に優しくしてしまう傾向があるのに対し、中学校では職場が男性優位であると認識する度合いが低いと「女子の方」につい優しくしていた割合が減少し「男女同じくらい」が8割を超えるほどに増加している。

また、「仕事を頼みやすいのは」を見ていくと、全般的に「男女同じくらい」が最も多いが、小学校では職場が男性優位であると認識する程度が高いと「女子の方」に仕事を頼

みやすいとする割合が多く、男性優位の組織文化に対する認識が低いと「女子の方」と回答する割合が減少していることが分かる。

【図表 -4-6】校種別 男性優位な組織文化と子どもたちへの接し方との関連

				問8(3)つい優しくしてしまうのは(%)			χ ²
				女子の方	男女同じくらい	男子の方	
小学校	男性優位な組織文化	高	N=60	15.0	81.7	3.3	n.s.
		中	N=147	21.1	75.5	3.4	
		低	N=108	21.3	77.8	0.9	
	合計	N=315		20.0	77.5	2.5	
中学校	男性優位な組織文化	高	N=51	31.4	66.7	2.0	*
		中	N=157	34.4	63.1	2.5	
		低	N=97	16.5	81.4	2.1	
	合計	N=305		28.2	69.5	2.3	
				問8(7)仕事を頼みやすいのは(%)			χ ²
				女子の方	男女同じくらい	男子の方	
小学校	男性優位な組織文化	高	N=61	26.2	60.7	13.1	**
		中	N=147	15.0	80.3	4.8	
		低	N=108	11.1	84.3	4.6	
	合計	N=316		15.8	77.8	6.3	
中学校	男性優位な組織文化	高	N=51	7.8	72.5	19.6	n.s.
		中	N=159	11.9	71.7	16.4	
		低	N=96	14.6	71.9	13.5	
	合計	N=306		12.1	71.9	16.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

以上から、職場が男性優位であるとの認識が高い場合は、男性教員・女性教員ともに同性の児童生徒により優しくしてしまう傾向が見られ、職場の男性優位性が低いとする場合は男女のどちらかにより優しくしてしまうという傾向が少なくなることが分かった。特に、中学校では、職場を男性優位だと高く認識しているほど「女子の方」に優しくしてしまうという従来のステレオタイプが見られた。

また、子どもへの仕事の頼みやすさについては、小学校における男性優位の組織文化の程度によって違いがあることが分かった。

このように、教員を取り巻く組織文化の状況は、教員の教育活動の違いと関連があり、子どもたちと接する時にもジェンダー・ステレオタイプによる相互作用の差異を生み出す場面があるということが明らかになった。教師からのジェンダー・ステレオタイピングについては、笹原（1999）が女子に対するステレオタイピングと男子に対するそれとは意味合いが異なり、男子に対しては学校で教員が児童の勉学意欲を引き出す際の動機づけとして女子と比較したジェンダー・ステレオタイピングを多く用いることを指摘している。子どもたち一人ひとりの能力を開花させ、男女ともに自立に向けた意欲と能力を高めることを目指すならば、教育達成を期待される男子と、男子の教育達成促進のための比較対象として位置づけられる女子という教育活動の構図には注意を払う必要があるだろう。

次節では、教員の教育活動の差異を生み出す別の視点として、受け持ちのクラスの状況に着目した分析をしていくことにする。

4.2. 受け持ちクラスの状況と教育活動との関連

受け持ちのクラスの状況は、教員の教育活動や子どもたちに対する見方・捉え方とどう関連するのだろうか。学級担任をしている教員に回答してもらった問3の項目について、「とてもそう思う」に1、「少しそう思う」に2、「あまりそう思わない」に3、「全くそう思わない」に4を与えて因子分析を行った。その際、「問3(4)子どもたちは男女分かれて行動することが多い」は他の項目と逆の傾向を示しているので、「とてもそう思う」に4、以下3～1の得点を与えた。その結果、【図表 -4-7】に示すように、2つの因子が検出された（KMO=0.749）。

【図表 -4-7】クラスについて感じることに関する因子行列

	第1因子	第2因子
問3(5)自分は子どもたちから信頼されている	.749	.165
問3(6)子どもたちは自分に期待している	.698	.124
問3(7)子どもたちは何でも話してくれる	.560	.208
問3(3)子どもたちはよく授業を聞いてくれる	.321	.253
問3(2)男女の仲が良いクラスだ	.163	.941
問3(1)みんなが協力し合うクラスだ	.371	.597
問3(4)子どもたちは男女分かれて行動することが多い(逆)	.112	.484

主因子法、Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法。3 回の反復で回転が収束。

このうち、「(3)子どもたちはよく授業を聞いてくれる」は因子負荷量が第1因子、第2因子ともに0.4未満だったので、【図表 -4-8】に示すように、この項目を除いて6項目で再

び因子分析を行った。

【図表 -4-8】クラスについて感じることに関する因子分析の結果

	第1因子	第2因子
問3(2)男女の仲が良いクラスだ	0.984	0.144
問3(1)みんなが協力し合うクラスだ	0.563	0.341
問3(4)子どもたちは男女に分かれて行動することが多い(逆)	0.490	0.125
問3(5)自分は子どもたちから信頼されている	0.178	0.739
問3(6)子どもたちは自分に期待している	0.136	0.709
問3(7)子どもたちは何でも話してくれる	0.217	0.567

主因子法。Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法。3 回の反復で回転が収束。

そこで、第1因子を構成する3項目を「男女協力的なクラス風土因子」とした（アルファ係数 = 0.7148）。また、第2因子を構成する3項目を「児童生徒からの期待・信頼度因子」とした（アルファ係数 = 0.7344）。「男女協力的なクラス風土因子」の得点は3~11までの分布があり、「児童生徒からの期待・信頼度因子」の得点は、3~12までの分布があった。ともに、数値が小さいほど児童生徒からの期待・信頼や男女協力的なクラスの雰囲気強く感じていることを示す。

これらの得点の平均値を教員の男女別・校種別でみたところ、「男女協力的なクラス風土因子」の平均値については校種別で有意差が見られ（*** $p < 0.001$ ）小学校 6.04（N=282）、中学校 6.93（N=188）で小学校の方が比較的受け持ちのクラスを男女協力的だと認識していた。また、「児童生徒からの期待・信頼度因子」の平均値については【図表 -4-9】に示すように男女別・校種別のそれぞれに有意差が見られ（*** $p < 0.001$ ）男性よりも女性教員の方が、そして中学校より小学校教員の方が子どもからの期待・信頼を強く認識している得点が高かった。

【図表 -4-9】校種別・男女別 児童生徒からの期待・信頼度平均値

校種	性別	平均値
小学校	男性 (N=86)	6.14
	女性 (N=183)	5.91
	合計 (N=269)	5.98
中学校	男性 (N=96)	7.05
	女性 (N=85)	6.52
	合計 (N=181)	6.80
全体	男性 (N=182)	6.62
	女性 (N=268)	6.10
	合計 (N=450)	6.31

このように、男女協力的なクラスの雰囲気に対しては小学校でより肯定的で、子どもたちからの期待や信頼を感じる度合いも小学校教員の方が肯定的で男性よりも女性教員の方が肯定的であった。子どもたちからの期待や信頼に対する認識は、教員の側にとっては教師としての自己肯定感などに影響する事柄であると思われる。こうした視点から見れば、中学校男性教員が最も子どもたちからの期待や信頼を感じにくい状況にあることは、前節で指摘した日頃の教育活動や子どもとの相互作用にも何らかのかたちで影響していると思われる。この点についてはさらに詳細な分析が必要になり、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 木村涼子 1999 『学校文化とジェンダー』勁草書房。
- 久富善之 1994 「教師と教師文化」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会。
- 宮崎あゆみ 1991「学校における『性役割の社会化』再考—教師による性別カテゴリー使用をてがかりとして—」『教育社会学研究第48集』, pp.105-123.
- 笹原恵 1999「ジェンダーの『社会化』」鎌田とし子・矢澤澄子・本木喜美子編『講座社会学 14 ジェンダー』東京大学出版会。
- 佐藤学 1994 「教師文化の構造」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会。